

589-54



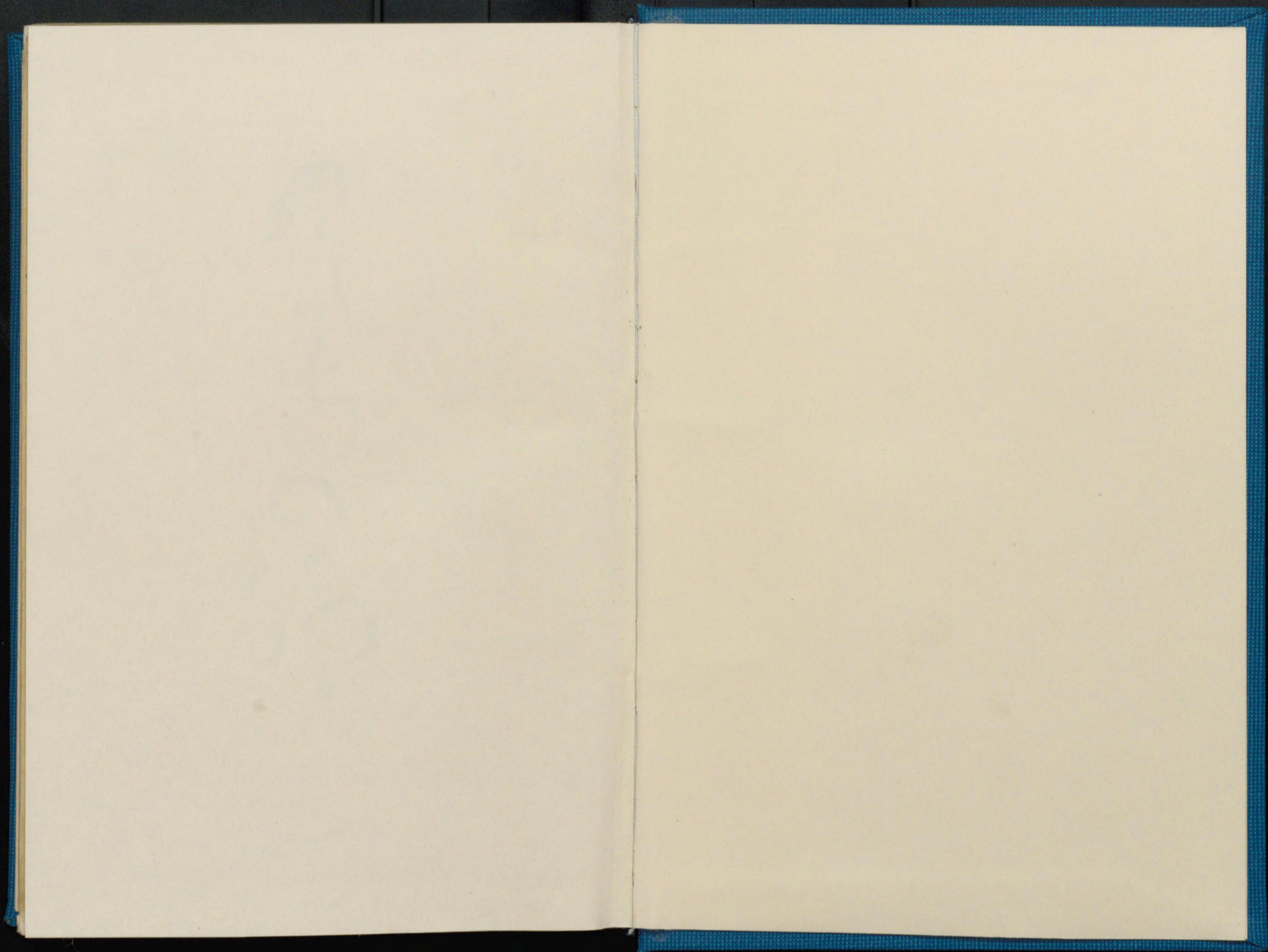
1200501525197

589

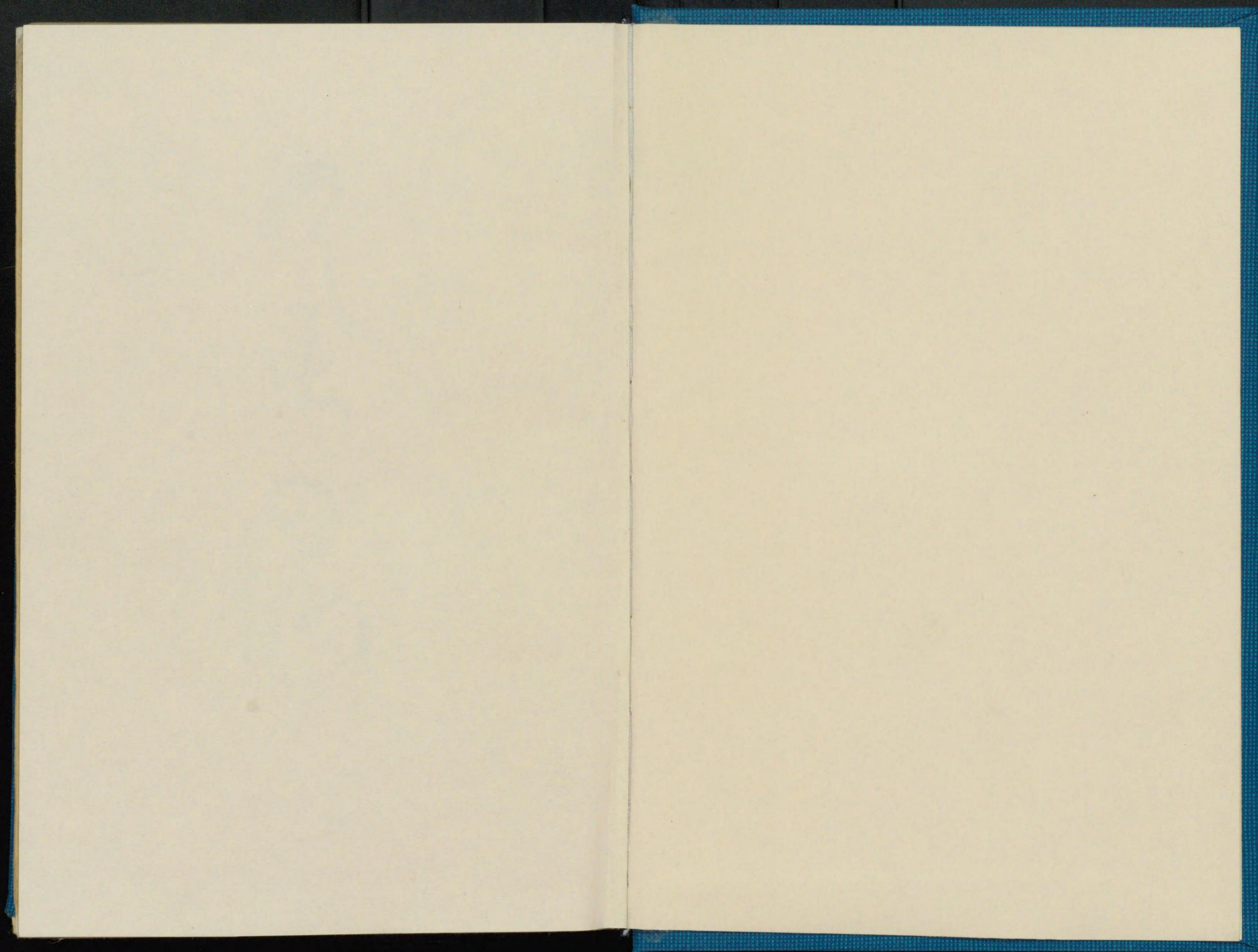
4

口  
複  
写



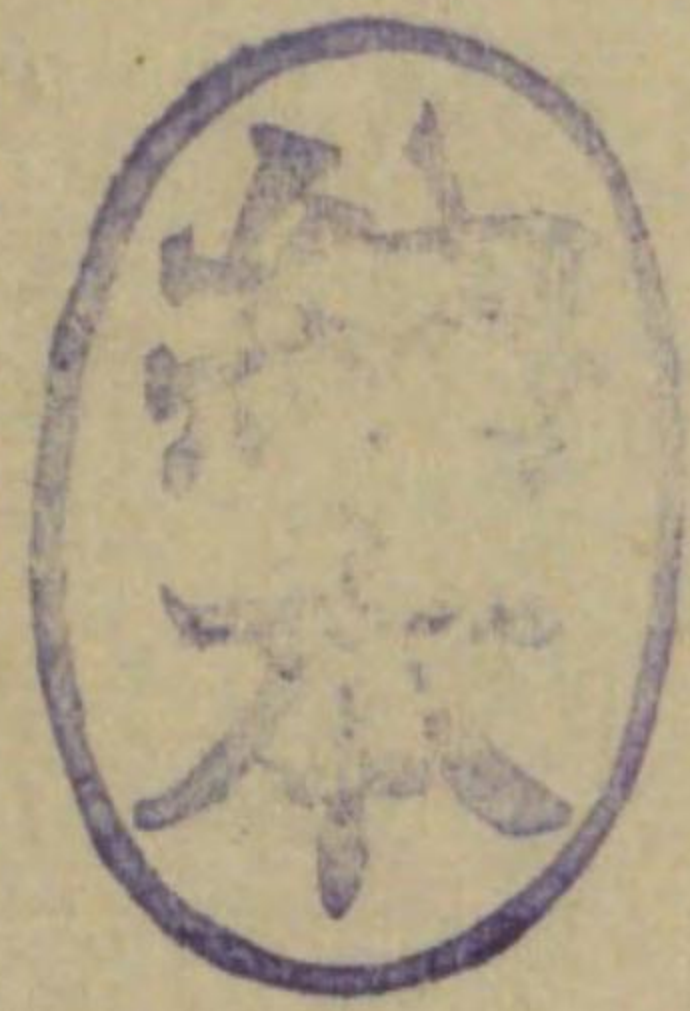








82-90-38



風の歌





589-54.

## 序

自分は最近隨筆ばかり書いて暮してゐた。隨筆も小説や詩と同様に苦しい作品であることを経験し、文章に自分の心境身邊の雰圍氣を沁み込ませることも、容易な仕事ではなかつた。自分は此隨筆的な愛すべき境致にゐて、靜かに自分を鍛へることに喜びを感じてゐた。

自分は自ら好む閑文字と俱に文藝評論や映畫の時評をも試み、これまでの隨筆的佶屈を蹴破つて出た明るい感じを経験してゐた。「天馬の脚」と題したのも、その明るさを表象したものに過ぎない。

原稿は當然破棄すべきものを捨てて、自分の氣に入つたものだけを本集にをさめた。林泉的閑文字の中にも後日の集に譲つたものも尠くない、主として「天馬の脚」には何か自分の變りかけてゐる、氣持の中に光る鋭いギザギザなものを蒐めたものである。

著

者



天馬の脚目錄



天馬の脚

天上の梯子

- 一 純文藝的な存在 三頁
- 二 文藝の士 五頁
- 三 文人趣味への反逆 八頁
- 四 僕の文藝的危機 一一頁
- 五 時代の経験 一三頁
- 六 生活的な流浪 一六頁
- 七 詩錢と稿料 一九頁
- 八 第一流の打込み 二二頁

九 「巖」

- 十 作家生活の不安 二七頁
- 十一 一本の映畫 二九頁
- 十二 フリイドリヒ・ニイチエ 三〇頁
- 十三 東洋の眞實 三一頁
- 十四 ドラクロア 三三頁
- 十五 賣文生活 三四頁
- 十六 ミケランゼロ 三七頁
- 十七 時なき人 三八頁
- 十八 雲 三九頁
- 十九 彼 四一頁
- 二十 或平凡 四一頁



月光的文獻

一 喫煙と死	四五頁
二 月と歴史に就て	四七頁
三 月から分れたる者	五〇頁
四 月光的詩人	五一頁
五 活動寫眞の月	五二頁
六 上田秋成	五四頁
六 古い月	五六頁
八 月光的感情に就て	五七頁
五八頁	五八頁
六一頁	六一頁
一 憂鬱なる庭	六三頁
二 「童子」の庭	六五頁

林泉雜稿

三 季節の痴情	六八頁
四 田端の里	七一頁
五 記録	七四頁
六 別れ	七七頁
七 曇天的な思想	七九頁
八 壽齡	八三頁
九 邦樂座	八六頁
十 短冊揮毫	八九頁
十一 「自叙傳」	九〇頁
十二 「大槻傳藏」の上演	九一頁
十三 茶摘	九三頁
十四 朝飯	九四頁



十五	童話	九五頁
十六	童謠	九七頁
十七	輕井澤	九九頁
詩に就て		一〇五頁
詩壇の柱		一〇七頁
詩歌の道		一一〇頁
詩と發句とに就て		一一三頁
遺傳的孤獨		一一四頁
悲壯なる人		一一六頁
十年の前方		一一七頁
詩錢		一一九頁
圓本の詩集		一二〇頁

詩情		一二二頁
詩集と自費出版に就て		一二五頁
過去の詩壇		一二六頁
敵國の人		一二八頁
文壇的雜草の榮光		一三三頁
ゴシツプ的鼠輩の沒落		一三四頁
文藝時評		一三七頁
一	月評家を弔す	一三九頁
二	肉體と作品	一四一頁
三	芥川、志賀、里見氏等の斷想	一四四頁
四	詩人出身の小説家	一四八頁
五	時勢の窓	一五一頁



六	齋藤茂吉氏の隨筆	一五三頁
七	勞作の人	一五六頁
八	作家の死後に就て	一五九頁
九	「文藝趣味」の常識化	一六三頁
十	大センチメンタリズムと長篇小説	一六五頁
十一	政治的情熱	一六八頁
十二	大衆作品の本體	一七〇頁
十三	稻垣足穂氏の耳に	一七三頁
十四	情熱と良心	一七五頁
十五	流行と不流行	一七六頁
十六	文藝家協會に望む	一七九頁
十七	批評と神經	一八一頁

十八	武者小路氏と「時代遅れ」	一八三頁
十九	背景的な作者	一八五頁
映畫時評		
一	エミール・ヤニングスの藝風	一九一頁
二	「最後の人」ヴァリエテ「肉體の道」タルチュフ」	一九三頁
三	ヤニングスと谷崎氏	一九七頁
四	フアンの感傷主義	一九八頁
五	「暗黒街」とスタンバーグ	二〇〇頁
六	スタンバーグと志賀氏	二〇二頁
七	「暗黒街」のバンクロフト	二〇四頁
八	映畫批評の立場	二〇六頁
九	文藝映畫の製作	二〇八頁



十	ドロレス・デル・リオの足	二二一頁
十一	クララ・ボウ論	二二三頁
十二	ブレノンとH・B・ワーナー	二一六頁
十三	スタンバーグの「陽炎の夢」に就て	二一八頁
十四	一場面の「聖畫」	二二一頁
十五	ポーラ・ネグリ	二二三頁
十六	コンラット・フアイト	二二五頁
十七	スタンバーグとチャップリン	二二八頁
十八	コールマンとマンジウ	二三五頁
十九	大河内傳次郎氏の形相	二三七頁
二十	伊藤大輔氏の「高田の馬場」	二三九頁
二十一	詩情と映畫	二四一頁

二十二	「十字路」	二四五頁
二十三	エキストラ・ガールの魅惑	二四八頁
二十四	リア・デ・ブテイ	二五〇頁
二十五	メイ・マツカザオイの脂肪に就て	二五二頁
和歌		
	夜半の埃三首	二五七頁
	故葉八首	二五九頁
	庭一首	二六〇頁
	屋根瓦七首	二六二頁
	眞冬一首	二六二頁
	銀座一首	二六四頁
	立春一首	二六五頁



發句

少年發句集	二六七頁
新年九句	二六九頁
春十六句	二七〇頁
夏七句	二七二頁
秋十句	二七六頁
冬二十一句	二七八頁
魚眠洞句集二十二句	二八一頁
人物と印象	二八七頁
徳田秋聲氏	二九三頁
正宗白鳥氏	二九五頁
高村光太郎氏	三〇一頁
	三〇四頁

白鳥省吾氏	三〇七頁
佐藤春夫氏と谷崎潤一郎氏	三一〇頁
宮地嘉六氏	三一三頁
加能作次郎氏	三一九頁
岸田劉生氏と佐藤惣之助氏	三二二頁

澄江堂雜記

芥川龍之介氏の人と作	三二九頁
芥川君と僕	三三一頁
清朝の人	三六五頁
芥川龍之介を憶ふ	三六八頁
書籍と批評	三七九頁
装幀と著者	三八一頁



作家と書物

三八三頁

「澄江堂句集」を評す

三八八頁

句集「道芝」を評す

三九一頁

「何もない庭」

三九五頁

「鏡花全集」に就て

三九八頁

「芥川全集」

四〇一頁

「山村暮鳥全集」

四〇三頁

喫煙雑筆

四〇七頁

喫煙雑筆

四〇九頁

煙草に就て

四二二頁

日録

四二五頁

四月日録

四二七頁

輕井澤日録

四四〇頁

續輕井澤日録

四四二頁

神無月日録

四四四頁

自畫像

四四四頁

室生犀屋論

四五二頁



天上の梯子

題簽 下島空谷  
裝幀 著者



### 一 純文藝的な存在

現代に於て純文藝的な作品のみで、一作家が生活を支へることは最早危険なことに違ひない。詩人が頑固に詩作ばかりで生計を爲すことは、最早現今に於ては不可能のことにされてゐるやうに、凡ゆる文藝の士もまた純粹な藝術的表現のみ、その牢乎たる藝術的潔癖を手頼ることは危険に近い努力であらう。一作家の氣魂にまで割り込んで行くところの熱と愛をもつ讀者は、殆ど文藝的な忠實な使徒以外には求められず、多くは興味本位のもの并要求しそれを愛讀するに至るであらう。

自分のごときは天下に百萬の讀者を持つものではないが、併し猶百騎の讀者を信じることに於て人後に落ちるものではない、俊英と愛慕との百騎はそれ自身後代への續きを意味し、百萬の蜉蝣はそれ自體何時しか散り易きものの常として散り失せるであらう。誠を愛



し読み味ふことは、却却讀者に求められるものではない。併も今日のごとく讀者が右往左往する時代に、何人が彼らの心臓的讀物たることを期し得よう。誠に清節であり得た讀者は一作家にどれだけも無いやうに、又その讀者の烈しい清節さは陰乍らよく努める作家らの轡を撫でて、なほ温恭の陣頭へ送り込むことは昔と渝りはないのだ。

併しかういふ大衆化の時勢に於てこそ、純文藝的な作品の透明を持つことが出来、厳しき朝暮の霜を人人に思はしめるであらう。純文藝風なもの存在の危ない時にこそ、その輝かしい烈しいものを叩きあげることが出来、詩錢を得ざる詩もなほ後代を信じる事が出来るのだ。自分の如く何事にも融通の利かない作風すら此儘押し上げるにより、役立たない才能を役立てるにより後代を信じる事が出来るであらう。益益純文藝的な、寧ろ頑固なまでの蘊奥を刺し貫いた古代と新代との續きにかがり、胡魔化しを振ぢ伏せて純粹なものに取り縋ることにより、我我の存在が決して輕蔑できない處にまで、行くところに行き着く氣概と勇勵とを併せ感ずるであらう。純文藝的なものの呼吸づかひのヤ

サシさ、そのきめの細かさ、粗大に優れた量積、「時」を抱きしめてゐる雄雄しい姿を人人は見るであらう。仕事場にゐる彼を見直し彼の仕事場にある「時代」の新しい面容を見る事が出来るであらう。

我我が大衆に割り込むことの不可能な才能を信じ、我我の過去の文學が大衆をどういふ風に育てたかを思ふ時に、我我の文學に大衆は間もなく踵を返すことを信じて疑はない。また我我の純文藝の立場にまで彼らを引き戻すことは、我我の古代のよき藝術がいつもそれに力があつたやうに、決して不思議な徒勞な現象ではない。我我はツルゲエネフの過去から既にその用意があり、それを迎へるに寧ろ微笑ひながら談し得るであらう。

## 二 文藝の士

紅葉、露伴や漱石、藤村なども文藝の士ではあるが、各發句や詩情を述べるに遂に一代



の大名を爲してゐる。西鶴も亦俳諧をよくし、芥川や久米三汀も亦發句道の達人である。齋藤茂吉の隨筆も亦自ら風格ある重厚な文章を爲し、古くは虚子も亦數篇の小説を書いてゐる。

自分は文人的好みを普遍的に叙説する時文家の徒ではないが、歌人俳人が小説を書くことや小説家が發句和歌を物することは、各その道の難きを知り自らその道の苦衷を慮る上に於て、我我文藝の士のみが感じる或親愛さへ念ふものである。これらを以て直に文人墨客趣味とは云はない、藝術の士はその分野の分けがたき雜草をも分け入り、岐路の微妙を大悟することは當然といへば當然過ぎることであらう。徒らに俳詩人のみが詩俳諧の殿堂に弓箭を番へることは、小説家がなほ小説の宮殿に己れを護るの頑愚と一般である。凡ゆる藝術の士は又凡ゆる藝術の諸道に通じ、その作者たることに遠慮は要らないと同様、それらの作品を齎すことに據つて美事な文藝の士たることは恥ではない。又別の意味で文藝の士の資格たるや歌俳詣の秘術を露くことも其一つではなからうか。

小説家であり得て生涯小説を物してゐるのも悪いことではないが、なほ一藝に秀でるは一層作者たるの所以を手厚くするやうである。秋聲に句道の志あり、鏡花に小唄や發句の閑境を窺ひ見られるからである。一代の文藝の士の諸道になほ一見識を持つことは、輓近漸く廢れて、荒野に花を見ることなきは詩情漸く地に墜ちようとするに似てゐる。とは云へ強ち文人趣味無き文人をなみする譯ではないが、荒涼たる人生の記述者にも此詩情あることは我我一讀者としても望むところである。

自分の如きは詩人ではあり幼にして文藝的生ひ立ちの朝暮には、和歌や發句や詩の道に己れを學ぶ機會を與へられ、長ずるに之らの精神を感じてゐながら遂に忘却の時をさへ強ひられたが、今にして顧るに之らの文藝的苗代の時代に學び得たるものが、鬱鬱として胸裡に蟠るの幸福は、徒らに作者たるのみの面目を持するの徒にくらべ、遙に喜びであるに違ひない。詩情は得難く法度に即かざるの嘆きは、遂に今日では自分に繰返す要がないやうである。



今、五十代の人人は多くは漢籍詩史により明治中期の、しかも明治人として最後の文人的資質の典型人として残つてゐるが、彼ら以後今四十代に近からんとする人人には、明治人としての平淺粗笨の時勢的惡夢の時永く、文人的好尚の時を經ないでゐる。しかも時勢とは用なき之らの漢籍詩史の埒外の教育は第三期の今の二十代の青年には、殆ど視目に觸れる事なく要無き徒事として忘れられてゐる。況やその道の士にして顧ることなき文藝的枝葉の成果は、今後益益滅び行くであらう。自分が又一讀書家として、彼ら文藝的達人の徒が己れの城砦にのみ籠るの域を出て廣き諸道の光彩を手に取り詠することを望むのは、荒唐の世に背く譯ではなく、荒唐の世に處するの素志であることを説きたいからである。

### 三 文人趣味への反逆

あらゆる文人墨客の趣味は、當代にあつては一つの心境上に試用される洗練や彫琢の類

ではない。その趣味が社交的な隱遁生活者の一つの資格であり得た時代、爲人としての嚙み込みによつて煩雜な時代の相貌に嘲笑しかける卑怯な「思ひ上り」であつた時代、何事も文人趣味に己れのみよしと決定したい加減な心境者の時代はもう過ぎた。凡ゆる文人趣味の表面的な爲人振りである誤謬は、遂にそれらの清閑と目された精神的高揚の中には、何等の霸氣もなく徒らに沈んだ退屈そのものだといふよりも、何よりもその趣味は當代にあつては完成されざる「心境上の疾患」であるといふ冷笑をさへ浴びせられるのも、いい加減な風流才子の輩出が起因してゐた。

あらゆる風流意識や傳統保持者の持つ「古い黄金」を紛碎してみても存外瓦石を發見することが多かつたのは、彼らの持つ心境が一時的のものであり、氣質的のものでないことに原因してゐた。隱遁それ自身の隠れ簞だつた風流意識は、我我が幾たびも之をたたき破るることによつて、誠の心境者、戰國時代風な心境者を形づくることに、己れを鞭打ち練磨を怠らせなかつたものだつた。凡ゆる文明の中にある寧ろ戰鬪的な思想をすら、その心境上



の背景に抑制してゐる一種の寂靜な心境、しかも横からも縦からも打ち込む隙間もない四方に鏡をもつ境涯にゐてこそ、初めて心境の達眼者たることも得、また風流者の資格をも得るものであらう。些の茶事造園の著書によりながら、また些の睨みをそなへる自信に媚びることによる今日の鼠輩が、風流を單なる文字面の淺慮な解釋によつて斬り捨てることは、彼自身の名譽を重んじることによつて自ら口を噤むべきことであらう。風流はそれ自身個々の氣質がもつ凡ゆる藝術的な分野を領し得るところの、それぞれの達人者によつて名づけられる名稱であり、一つの辭書的な解釋による單なる風流でないことが分つて來た今の時代には、何人も風流人であり得る譯だ。これを嘲り笑ふことは彼自身の淺薄さを我々に暴露するものに外ならない。

我我はもはや「古い黄金」の中身に欺かれず、またそれを欲しようとしめない。唯我我の求めるものは中身もまた輝くところの「古い黄金」の心境であるものに限るのだ。風流が單なる風流意識の封建的な埒の外に、あらゆる世相を抱へ込むことを怠らない限り、初

めて完成されるのだ。いい加減な枯淡思想は一種の胡魔化しを吹き込むことによつて、もう亡びてゐることは事實である。我我が輕蔑されて來たこれらの明快な悒鬱を拒絶した意識の下では、もはや何人の前にも「風流」そのものがなほ一時逃れのものでなく、我我の生涯を圍繞する鋭い新鮮な一つの「今日思想」であることに心付くであらう。

#### 四 僕の文藝的危機

自分の熟熟この頃おもふことは樂な仕事をしてはならぬといふことである。樂な仕事それ自身三枚書けば三枚分だけだらけ、五枚書けば五枚分だけだらける習慣が永い間に恐ろしい痼疾になるからだ。樂な友人交際には何の緊張もなくダラけ切つてしまふのだ。自分是不惑の年齢にゆきあうて又思ふことは、もう最後に緊め付け打ち込まねばならぬと云ふことである。もう一度立ち直らねばならぬ事、いま立たねば飢ゑかつゑてしまふ事、それ



は絶対に取返しつかない大饑饉である事、結局妻子や一門を嘆かすことの前に私自身が是が非でも力一杯で打つかつて行かねばならぬ事、力一杯で打ち込むことは必ずもう一度立つことを意味するであらう。根の限り揮ひ立たねばならぬ。樂なものは一枚でも書いてはならぬことである。それはどういふ意味に於ても必要であり、自分の死物狂ひを正氣まで引き戻し勉強させるであらう。

芥川君の死は自分の何物かを蹶散らした。彼は彼の風流の假面を肉のついた儘、引べがしたのだつた。彼は僕のごとき者を其末期に於ては輕蔑したであらう。自分は漸く友の溫容の中に一すぢ烈しい輕蔑を感じることに依つて、一層この友に親しみを感じた。自分は自分自身に役立たせるために此友の死をも攝取せねばならぬ。何と云つても彼が作の上がないもの、僕自身が勝手に考へ耽るものを僕の中に惹き入れることに據つて彼自身を閻魔の廳から引き摺り出さねばならぬのだ。彼自身が持つ僕への微かな輕蔑の情を彼自身の爪によつて、自分の諸の仕事に據つて取り消させることが出来るであらう。彼の死を僕の或

文藝的の危期から立つことに依り、劃然としきることが出来るであらう。

彼の長髪瘦軀は實際自分には様様な場所に見えた。自動車のドアから下りようとする彼、動坂の埃と煙の中から出て来る彼、田端の垣根と垣根の間を歩く彼、そして僕の彼から取り戻すことは此一つの輕蔑の思念だつた。

## 五 時代の經驗

或日自分のところに支那の古硯を商ふ男が来て、掘出し物の古い壺を見せてくれ、自分はそれらの壺を人目には氣永に丹念に捻り廻して眺めてゐた。其座に來合せてゐた一青年は、時折自分と陶器とを見較べゐたが、硯を商ふ男が歸ると、一青年は徐に自分に對うて質すがごとく云ふのであつた。

「あなたが陶器を見たり硯に息を吹きかけてゐられるのを見てゐると、僕らの氣持とは全



然異つてゐるやうに思はれるのです。あなたはああいふ硯や陶器を見ることは愉快なんですか。

「君はどうです。」

「僕には解らないんです。併し今の僕らの氣持はああいふ陶器などに絶対に好意を持ちません。」

自分は此青年が歸つたあと、青年が硯や陶器を見て興味の起らない氣持に同感することが出来、彼の人生には死んだ表情をしか見られない硯や陶器に就ては、絶対に必要の無い路傍の瓦石の類と同じであらう。詩や小説への熱情を持ち、凡ゆる新しい時代の氣持を噛み分けようとする年若い彼に取つて、古陶の精神や硯の石質に就て思ひを砕くことは、愚昧なる戯事でなければ骨董屋の手すさびとしか見えなかつたであらう。自分がそれを捻くり廻してゐる時に、彼は青年らしく自分を恐らく輕蔑した氣持で見てもたかも知れない。さういふ靜寂さは青年に取つて息塞る退屈なものであり、充分に輕蔑すべき事柄であつた

かも知れない。

青年には古い物質から新しい物を考へようとする氣持、秀れた古さの中に必然に身ごもる新しさの潜みが、彼の短い生涯からは見えよう筈がなかつた。凡ゆる新しい時代の呼吸づかひを生活しようとする劇しい氣質の中にある彼には、古代の背景と光をもつ新しさよりも目の前の新しさがどういふ新しさでも其形をもつて居ればよかつた。新しさのもつ危機、新しさのもつ輕佻と淺薄とさへも彼らは屢屢忘れ勝ちな程の新時代の青年だつた。併も青年の人生にはさういふ古さを引摺る生ぬるい必要はなかつたのだ。

自分は性質として凡ゆる古代を渴愛した。古代の精髓の中にある新鮮を汲むことを熱望した。陶器にせよ硯にせよ文學にせよ、それらの古色蒼然の中からは百代に光芒を揺曳する新鮮を見極めることによつて、嚴格無雙の「古代」の額縁の中にある新しさを發見しなければならなかつた。これは永い生涯を経験したもののみが讀み分けられる特異な新しさではなかつたか、我々の生涯へまで彼らが來なければ見られぬ「古代」の姿ではなかつた



か。  
人間はそれ自身生きることの深い層をたたくことによつて、彼自身の存在を明かにすることは云ふまでもない。青年と自分との分岐點、自分と彼との、存在の距離には、自分としては生き得た光茫とともにあることも、聽て彼もまた生き得て後に初めて今日の自分を理解することであらう。

## 六 生活的な流浪

自分は此頃物を書く時には机のわきに一物を置くことさへ、神經的な煩しさを感じ、もう絶対に書物や茶器を手元に置かないことにしてゐる。一帖の原稿紙に鋭い冬の寒氣の揮ふ中に坐つて居れば、心足りるやうな思ひがしてゐる。自分のやうな表面的にも落着いた生活をしてゐるものは、年年歳歳その生活の古い根や枝葉が組み合ひ鳥渡引越すにしても

並大抵の苦勞ではない。石を起し樹を移し代へるだけでも自分には重荷である。陶器や書物、器物なども年年に殖えて數を増し、生活は複雑な層を作るばかりである。さういふ通俗的な複雑さは彌が上にも自分を憂鬱にし、身動きの出来ないやうな退嬰的な状態に置き、心に固い物質的な感覺ばかりをこだはらせ、それらの古い由緒をもつ物質の中に坐つてゐると、神經の疲勞は日に増して重く苛立たしく募つてくる許りである。自分は身輕に立ち上るためにそれらの生活を、身悶えしながら其鎖を斷ち切らうとしてゐる。

自分は此春になつて荷物を引纏めて何處かの知人の許に預け、幾つかの行李とトランクを携へたまま、一家を擧げて漂然と旅に出ることを考へてゐる。半年くらゐ流浪の暮しをしたら心も自由になり、身輕な朝夕を送ることができよう。今のままでは落着くだけ落つく危険さを感じられてならぬ。最初信州へ行き二三ヶ月を山の中で暮し、故郷へ廻り其處でしばらく遊び、京都で二三ヶ月をくらしした上で、歸郷して來たら少しは氣持に廣さができ、信屈と憂鬱さから解き放たれるやうになるだらう。さういふ長期の旅行には一家をあ



げて流れ歩くのが、生活の重みを感じられていい。自分一人で旅へ出るよりも一家とともに行くのが、何か自分の意嚮とびつたりしてゐて氣の張り方も感じられる。勘くとも土地土地の人情を感じるにしても、一家の生活から沁み出してくるものから感じるのが、本統の物を的確に思ひ當て搜ぐることが出来るのだ。

誠の意嚮は物質的な固い氣持から放れるだけでよい。四五年の生活的な埃や垢から立ち上るだけでも少しは氣持の清淨と新鮮とを感じられるだらう。どういふ家庭でも三年目くらゐにその生活を新鮮な方に引寄せer必要がある。又どういふ家庭でも三年目くらゐにそれ自身に或轉期を醸酵させることも有勝ちのことだ。倦怠を叩き破ることも左ういふ時に勇敢に進まなければ、その機會を外す怖れがある。自分の一家を擧げて流浪しようとする氣持の根ざしも、その機會をうまく自分の氣持に添はせる爲に外ならない、——そして又新しい自分を親しみ合せることに喜びと努力とを感じたいのだ。

## 七 詩錢と稿料

自分は今までに詩や文を賣つて不安ながら今日の生活を支へてゐる。僅か一枚の詩稿でも需に應じて金に換へてゐるが、詩の稿料の場合はどうかすると微か乍ら感傷的な氣持になり、成可く有用な家事につかふことにしてゐる。年少詩を志して上京した自分は、まだ此幼い王國に遊行した日の種種な憂苦を忘れることが出来なかつた。この私に何時も絶えず良心の刺戟があつたからであらう。

自分は三十歳まで詩錢や原稿料を取ることが出来なかつた。併も自分には其等の不平や呪咀の經驗を持たなかつた。自分は父の遺産を僅かつつ取り出して暮してゐたからである。その頃の大抵の詩人は詩の稿料を取ることが出来なかつたのも殆ど當然だつた。自分は詩の稿料に相應の金を求めるのも、天下に恥ぢる事無き今日までの「我々」への感謝の氣持



があるからだ。曾て或日詩錢を得て一羽の鶯を飼うてゐたが、春暖の候に佐藤春夫が来てその話を聞いて、甚だ不機嫌な顔付をして恰も鶯を飼ふ自分が贅澤のやうな口調だつた。併し自分は間もなく彼が他の小鳥を飼養してゐるのを見て、夫子自ら辯無きことを思うた程であつた。四五年の後に彼が果してその小鳥が、偶々「鶯」だつた爲に、自分に攻勢的態度を取つたのではないかと思ひ付いた。そのころ自分は既に「鶯」の境涯を卒業してゐたばかりでなく、凡ゆる小鳥を飼ふ氣持の中に烈しい寂寞の情を感じ出してゐたからである。さういふ安價なその爲に烈しい寂寞の想ひは到底自分には我慢のできる程度のもでは無かつた。

自分は三十歳後に小説を書いて漸つと生計上の一人前の資格を得たが、同時に小説を書き出してから、その仕事から人間が次第に出来上つてゆくことを感じた。詩に遊ぶこと十五年だつたが小説を書いて二三年の間に、どれだけ自分は人になれたかも知れなかつた。作の上の苦衷は自ら自分を新しく組立てるに忙しい程だつた。自分が人前に立つことの出

来る所以は、凡下の微笑裡に悠然と自分を曇り得ることも、小説を學んだための餘光を浴びたからであらう。小説學の途に就かない前の自分は依然として草花詩人の群の中に、聞くに耐へない囁言を綴り乍ら或は一生を終つたかも知れなかつた。自分の如きは元より學園に友無く又その榮光をさへ負はないものであるが、それ故に「人に」ならうとする氣持の烈しい中に立つたものかも知れない。さういふ意味で小説學は物質的といふよりも寧ろ「人に」なるための鞭や答の熾烈さを、自分のごときぼんくらの腦漿にひびき立てて打ち卸されるもの一つであらう。

不思議なことには自分は未だに原稿料について、それを得ることに或謙遜を感じてゐる。これは狡猾な言葉で無い意味で自分の中にある或物質的センチメンタリズムである。それ故にこそ自分は時に原稿料のことにケチ臭く奮闘するのである。穩やかな交渉の中にそれらの取引を了することは、同時に仕事の幸福さを思ひ益益それに昂じてはならぬと思ふ程である。併乍らそれらの期日の相違に反射される不愉快な氣持で、残酷な文人墨客的平靜



の努力に敢て就かなければならぬことは何たる文人墨客の不幸さであらう。さういふ時に自分に取つて美しい謙遜の情は消え失せるのが常である。

## 八 第一流の打込み

心境小説に就て餘り人人は最う云はないやうである。併も私自身にはどういふ意味にも心境小説の存在を振ち上げ驅逐することができない、——心境小説はそれ自身どういふ非難の中に立ち竦み乍らも、益益自身を掘り下げ磨き上げ、次から次へと新鮮な彼自身の役目を發見することに據つて、僕の場合には依然として存在するであらう。心境小説の病根は寫眞を引き伸したやうな日記的生活の腐肉を扶ることにより、漸く人人に飽かれもし没落もしたのであらう。

凡ゆる藝術は優秀な作家的心境を外にして立ち得るものではない。唯その心境にまで達

し得ないもの、既に腐肉の心境の墮勢を緩ることによつて下り坂のものは、到底救ひ得ないものであらう。そして又没落したものは既にさういふ種類のものであつたらう。それらの心境の練磨や進歩や度外れの勇躍に對しては、我我は非難の劍を取つて袈裟がけに斬り下す必要はないやうである。唯、恐るべきことは書きよいために心境小説をかくことは飽迄我我の中から退治しなければならぬ。心境へ這入ることは容易なことであつて、同時にその縹渺を手摺みにすることはその道の達人でなければ、出来ない仕事である。我我にしろ彼らにせよ、危い日記的陷穽と寫眞引伸しの境涯を完全に蹶散し踏み破ることの把握の大きさにより、私は私の心境的小説を示し又彼らにも承認させねばならぬ。寫眞引伸し的小説の壁を衝き抜けることは、云ふごとくして行はれざる至難の道であり、同時に我我の鳥渡した油斷してゐる間に小説自身がそれを搬ぶからである。三四行ばかりの引伸し的描寫自身の運びが恐ろしい日記的引伸しの機運を興へ、その弛みが全篇に物憂い疲勞を漂はすからだ。心境小説にはそれらの危険を油斷なく虱潰しにしてゆくことによつて、光



榮ある存在をその將來に於て益益物語るであらう。  
 或意味に於て心境小説は第一流の切迫的な打込みを要し、又第一流の新鮮な文章以前の文章の素朴を要するであらう。彼らに肝要なものは最早あらゆる藝術的要素の最高のものありと凡ゆるうまさ氣高さ、その比類のない濁らぬ稟性から出發すべき條件を忘れてはならない。日記引伸し作者の心境が既に我我のいふ心境のかたちさへ保つてゐない如く、我我の温順の情を有つてさへそれらを振顧る必要はない。我我の心境にある埃や瓦や石やブリキや常用日記や生活ボロが騒然と入り交つてゐても、それらの上になほ不斷にきりつとしてゐるものや、眞面目な一杯の力や、毎日幾らかづつ良くなるやうに心掛ける努力あつてこそ、我我の心境は人前に怖ぢず又彼らに匹敵し、次第に良くなつて行くであらう。

## 九 「巖」いはは

自分は機會があつて昨年中に文學者に接見することが多かつた。そして島崎藤村氏にも或會合で度度お會ひした。自分は藤村氏の端正すぎる文藝的身構に或恐怖と誤解とを有つてゐたことを、即座に趁ひ出すことが出來て仕合せだつた。凡ゆる老大家のもつところの又優れた人人のもつ「巖」を藤村氏は有つて居られた。秋聲、白鳥の二氏も亦その「巖」に手をかけられてゐるが、藤村氏には就中それが強く感じられた。自分のこの見方を朗らかに藤村氏に達し得たことは、私自身に快適な心持であつた。

自分も亦「巖」を戀してゐると云つたら人人は嘖ふだらう。自分はむしろ「巖」に壓迫されて呻吟することもよいが、自分の見た「巖」は瞬間的に何ともいへずよい氣持であつた。自分の文學的小學時代に「島崎藤村」といふ名前は實に遙かに高い處にあつた。「春」



や「破戒」を読んだ自分はまだ人生への方向さへ分らなかつた。しかも「島崎藤村」とは自分の生涯の中で、それと膝を交へて語ることの機會の無いことは覺悟してゐた。そして漸く昨今「島崎藤村」と膝を交へ、話すことができたのは、自分の年少にして熱烈な文學的希望めいたものを、何等の面倒や辭令無くして叶へられたと同様の喜ばしさだつた。誰かの言草ではないが、手におへねえ餓鬼の手柄だつた。自分は白哲童顔の「島崎藤村」を一瞥した時に、他の言葉は知らず直ちに「島崎藤村」を理解するに十分間を要しなかつた程だつた。十年間「島崎藤村」を読んだものとしては當然の事であらう。

自分は不惑の年になり色色の機會あるごとに、文壇の諸君子の風咳に接したい熱望をもつてゐる。その楽しい最初の十分間に自分は行き會ふだけのものを用意し、大抵人見知りや厭な氣持にならずにゐたいものである。自分はかういふ用意のできる時を持つために話をしなかつた人人に、會うて又教へられるところを攝らねばならない。

## 十 作家生活の不安

輓近雑誌の廢刊や世上の不況から、作家は一荐りのやうな収入を得るに困難であり、同時にこれらの不景氣は心ある文人をして昔の「破垣を結ぶ」氣持の烈しさへ追ひ戻されたことは實際である。眼光自らその「時代」の落着いた美の中に住むことに慣れて、より良き作家はかういふ時に徐ろに立つであらう。

一圓本流行はそれらの標的になるべき作家を網羅したものの、さういふ印税は作家を一年半位しか休息させないことを考へると、大して稅務署まで騒ぐ必要はなからう。當然酬いらるべき作家の「もの」だつたものが、年月を経て作家の手に落ちて來たものに過ぎないであらう。何も改造社や新潮社春陽堂の仕事ばかりでなく、作家と和合半ばした共同事業のそれであると云つてもよい位、彼らに酬いらるべきものは酬いられたと云つてよいで



あらう。風雨の永い歲月の間に一年くらゐの休息は精神勞役に近い仕事にたづさはる者には、當然酬いられてよいことであらう。自分はこれらの印稅的現象は大して作家を樂にさせないと思つてゐる。不況の時代は一層その底を洗ふとしても、我我は既にその用意が出来てゐるとしか云へない。

我我は約つづしやかな破垣を結ぶことにより、生活の幅をちぢめることにより、その底に物凄く昔の苦行的な自身に再會することにより、決して良くなつても萎え凋むことはなからう。圓本に漏れるものは或者は猶十年後の圓本を超越してまでも、一行二行の苦節を守ることに精神するであらう。我我は遂に百萬の讀者を失うても、我我の子女は靜かに夕方の涼しい蔭をつくる楡の木の下で、我我の「青い汗」を慈しみ讀み耽るであらう。我我や我我の友は遂にさういふ誠の一人か二人かの讀者を後代に選み出して、安らかに眠りに就くであらう。安んぜよ、我我と我我の友よ。

## 十一 一本の映畫

自分は何時か生涯のうちに一本の映畫を自分で監督し乍ら製作したい考へを持つてゐる。自分は最早文學の力を用ひず映畫の表現により、總ゆる自分の自叙傳的なものの會て自分に取つて失ふことの出来ない光景、過去の幽靈、または既に剝落されたその時代の經過的な文明、さういふ自己を表現することは最早文學に於て陳套であり、又敢て先人の道を踏むに耐へない思ひがするからである。

映畫はあらゆる文學に清新な肉づけを爲し、又映畫自身のサイコロヂイを文學に寄與することに依つて、我我は我我の自叙傳的な受難と數奇と情熱とを完全に把握し描寫することができらう。文章に表せない我我の情操的なエエテル、千九百十年代の淺草の靡亂した韻律、その瞬間的な經過、結局音樂的な表出による我我の悲哀化は美事に製作され



完成されるであらう。我我はその影青き世界に充分に號泣もし又少しも妥協することなき命運への反逆、悪を蹶落すところのサルベーション・ハンターズ風な立場を獲得すること出来るであらう。誠に自分は今は映畫が單なる他山の石や形式ではなく、既に自分に役立つ藝術上の一様式だつたことを發見し、今後の自分が奈何に映畫を自分の内外に生かすかと言ふことに就いて、自分は今日もこの選ばれた生涯の中に「一本の映畫」を考へ耽つてゐる。

## 十二 フリイドリヒ・ニイチエ

自分は或不機嫌な朝に山の頂を彷徨してゐる風體の悪い男を一氣に蹶落した。彼は殆ど抵抗することも無く千仞の谷間に逆さまに墜落して行つた。

自分は彼のゐた後を叮嚀に見廻つたけれど、鳶色の反古紙一枚残されてゐなかつた。自

分は自分の疇癪を起したことをさへ遂に後悔した。餘りに永い間擅に自分の中に巢喰ひ、餘りに永い間自分に影響を残さうとしてゐた彼を、自分は谷の上から慘酷な目附で見下ろしてゐた。自分は寧ろ耶蘇に温かい愛情を感じた。縱令同じ嘔吐き岡志であるにせよ、彼程完全に我我の中にその傲岸の泥足をもつて、猛猛しく居直つてゐた男はなかつた。爾、フリイドリヒ・ニイチエ！

## 十三 東洋の眞實

あらゆる西洋の作家はその晩年に至つて或宗教を完成し表現した。彼らは均しく宗教風な觀念に美と愛とを感じてゐた。トルストイ、ドストエフスキイは云はずもあれ、ルツオ、ストリンドベリイ、ヴェルレエヌ、——併乍ら東洋の諸詩人は宗教よりも一層手厚い眞實を自然や人情の中に求めてゐた。芭蕉や元義、西行や蕪村、子規や龍之介、彼等は眞



實を搜ね求めるために、或は生涯妻を求めず、又永い間病褥にあり乍ら天地の幽遠に思を馳せることを怠らなかつた。

詩人芥川龍之介の求め喘いでゐたものも、眞實以外の人生ではなかつた。また正宗白鳥があれ程永い間人間の荒涼の中にうろついてゐるのも、結局眞實を的確に握り締める以外彼の誠の欲望は無かつた。西洋の諸詩人が均しく宗教の觀念へ入り込むのも、彼らの本質的な寧ろ血液的な傳統にまで逆流するに外ならない現象だつた。チントレットやダ・ヴィンチ、ルウベンスやマンテニア、ミレーの昔から彼らの中に交流してゐる宗教だつた。

東洋の寂しい諦めは鳥羽僧正の戲畫をして、七百年の昔の高雅な諷刺や嘲笑に變貌させ、芭蕉をして眞實の中に微かな宗教の炎を仰がしめたことは事實であるが、それらは眞實の掬以外、斷じて宗教的な基督教的憂鬱を帯びるものではなかつた。唯彼らには何か知ら佛教的な法悦の微風の中にゐることは否めなかつたが、併乍ら子規や龍之介の時代には——殊に龍之介は一切を自己の中に叩き込んでゐた。自己の中に整理されない人生をも彼は苦

虫を噛み潰して耐へてゐた。彼を喜ばしめたものは嘗に藝術の止むなき一途あるのみだつた。彼は最後まで正直な藝道の使徒でありペテロだつた。わが正宗白鳥は、最後まで下駄ばきのまま人生の殿堂に詣でいそしみ、露骨に眞實を訪れることは昨日と何等の渝りは無かつた。彼白鳥の如く寂しくその道を丹念に歩き求める人があらうか？ 風流韻事を憎悪しながら何と彼は空寂な氣持で押切る詩人だつたらうか？——

#### 十四 ドラクロア

自分は烈しい寒さの中に窓外を過ぎる鐵の蹄の音を聞いてゐた。自分は書き物をしながら時々ちらりとそれらの馬上の者を見過してゐたが、自分は書き物に夢中となりそれらの者を折折忘れてゐた。彼らは自分を呼び出さうとするのか？——鐵の蹄の音は殆ど絶え間もなく石の上を敲いて過ぎてゐた。自分は其時初めて獅子の群を、若いドラクロアの姿を



蠶のかげに眼に入れたのだつた。青い獅子の上に跨る若いドラクロア、自分自身の中に既に失ひかけてゐるドラクロア風な情熱、自分はペンを擱いて窓外を四顧した。天気は既に暗澹たる雲の中にまじく亂れかけてゐた。わがドラクロアはその雲間を目掛けて馳り續けてゐるのであらう。鐵蹄に似た音は自分の机のほとりにまで入り亂れてゐた。自分は激しい身震ひを感じながら、ドラクロアの大幅を埃の中から引摺り出した。そして「青い獅子」を授りはじめた。自分は永い間この獅子の姿を忘れてゐたからだつた。

## 十五 賣文生活

自分が賣文の嘆きを綴るのも亦久しいものである。自分は何時此嘆きから釋放されるかは疑問であるが、恐らく生涯同じい嘆息と喘ぎとを續け乍ら、些か壯烈な思ひがしないでもないやうである。燃え残りの熱情に鞭打つものの無慘さは、遂に心神の疲勞以外何物も

残さないであらう。人はじめに最後まで生活するものであらば、自分もその惨めな一役の道化を演じてゐるに過ぎない。

芭蕉や萬葉の諸詩人は決して賣文の嘆きを繰り返してはゐない。或は芭蕉も拙劣な句撰の嘆きを同じうしたかも知れぬ。唯それはそれとして彼は彼の生活の内外に煩はされるところが無かつたかも知れぬ。彼の詩人としての潔癖と高踏風な布置は、その賣文生活に觸れた一句をさへ示してないやうである。併も彼程生活の中には入つてゐるものは稀であると言つてよい。唯彼は日常些細の嘆きを己れの魂に鍊り込んでゐたに過ぎないやうである。彼の嘆きは彼の詩の中のみ喘いでゐたであらう。彼は彼の生活的困窮をさへ彼の詩の中へ追ひ込み、しかも彼は莞爾たる温姿のうちに、事無きがごとく清風面を過ぎるが如き面持でゐたであらう。

併乍ら後代の蕪村には生活苦は犇犇として逼つてゐたらしい。百年の後には自ら世相も又元祿の悠長を夢見られなかつたことは勿論であらうが、蕪村は自ら畫と句との卷を作り



之を賣つてゐた。その詩句も生活苦に直面したのも少数ではない。芭蕉がその魂魄の中に溶解しつくした生活苦すら、天明の時代には許されなかつたのであらう。

自分の賣文の嗟嘆はこれらの諸詩人に較べては、或は贅澤の沙汰かも知れぬ。時勢は既に賣文の嘆きをすら嘆かして置かないやうになるかも知れぬ。併も今は自分に残るものは此嘆き以外の物ではないのである。古來の支那の諸詩人は皆同じく斗酒の中に醉吟を擅にした。併し彼らも亦生活苦の域を脱する事ができなかつた。ヴェルレエヌも亦一章の詩を書肆に賣つてゐたことは、彼の賣文的嗟嘆に據らずとも容易に想像することが出来る。

最早我我に一途あるものはあらゆる疲弊盡したる賣文の徒も、猶あらゆる惨忍なる編輯者とともその喝采の慘澹たる光榮の道を進まねばならぬ。又あらゆる我我廢馬的心神に甦る「天馬」の美しい脚なみを訓練せねばならぬ。斯くて我我の嘆きは次第に消失するであらう。

## 十六 ミケランゼロ

自分らは何時目に見えぬ無数の悪魔と戦うてゐる。此悪魔の中には借金取も戀敵も又生活苦も雜つてゐる。夜半に目覺めて描くところはミケランゼロの壁畫と變りのない地獄の中に、常に顛倒してゐる自身の呻吟のみである。悪魔は外に低迷してゐるものでなく、遂に無慘にも「我」の中で暴風のやうに荒れ狂うてゐた。

悪魔は百本の足を持つて自分を趁うてゐる。夢の中で犬に嚙付かれたやうに悪魔はもはや自分を離れようとはしない。自分は彼と追ひくらをしながら暮してゐるやうなものである。ミケランゼロは又その莊嚴なる貧窮の中に自分の錯覺するところのものを日夜夢見たであらうか。自分も亦地獄篇の中に喘ぐところの現世の我である。



## 十七 時なき人

この頃自分はよく「時」に関係のない清爽な人間にたびたび出會し、その人と話を交す氣持になることがある。その人は自分の記憶の中にももう無くなつてゐる人だが、無くなつてゐるといふ事實が一層記憶に新しかつた。自分はかつて「時」の人であつた彼が「時」の境域を拒絶してから、一俤彼を熱慕するに耐へなかつた。

「時」の人だつた彼へ書くその追憶文を自分は諸所から求められた。しかし時を拒んだ彼へ送る追憶の文は墓下にある彼を騷しくするために、自分は一切書かなかつた。しかし自分は殆ど毎日氣持の中で追悼文を書いてゐたといつてよい。精神で書き疲れてゐた自分は彼への活字の文は書かなかつた。

自分は常に一介の賣文の徒だつた。時を拒んだ人へは、自分はその業を休んで謹んでゐ

たのである。正直な靴屋は昔その童話の國の同じ兄弟の死に遭うては、王者の靴をさへ縫はなかつた。今人である自分が時なき人への恭愼の情を護るためには、その文をも暫く封すべきであつた。尠くとも性利發ならざる自分の信するところは、その愚直なる一途の謹愼あるのみであつた。

時なき人は現世の自分の前に無言のまま佇んで「時」を持つ自分を慙むに近かつた。自分もその「時」の煩しさ辛さを感じながらも、仕方なしに彼の前に躊躇しながら佇んでゐた。時なき人は何時かは鞭を持つて自分を打つてあらう。

打て、然して君のなほ自分に教へんとするところを示せよ。

## 十八 雲

自分は今年信州の高原に夏百日を送り、秋風を肌身に感じながら毎日雲の去來を見て暮



した。朝に湧き夕に散る片雲の去來は、容易に自分達人類の滅びた後にもなほその悪魔の如き形相を示すことを歇めないであらう。彼はまさに「時」なき不斷なる悪魔だつた。

自分は彼を數へるに數十の悪鬼の姿を想像し、又あらゆる知己朋有の面相を思ひ描いて見た。彼は優しい或女の顔をさへ浮ばせて見せた。あらゆる宮殿や高雅なる園庭をも、遙か下界の椅子の上に臥てゐる自分にひろげて見せた。自分の妻子や朋友の凡てがなくなつても、彼、漠漠たる片雲のみがこの世を領してゐることは疑へなかつた。彼は自分の死滅の靜寂さへも浮べてゐたからである。自分がかう考へてゐる中にも、山上の密雲はぎらぎら底光りを潜ませ、悠悠と或は奇峰や深淵や斷續を續けながら迫つてゐた。それを見てゐると自分は何か恐怖以上の恐怖を感じるのが常だつた。

彼は時をも又何者をも持たなかつた。唯、その物凄く千古の形相は百萬の悪魔を日夜に駈り立てて靜かに仰臥してゐる自分を脅かした。自分はこの密雲のぎつしりした息苦しさ

を双肩に感じてゐた。

## 十九 彼

悪魔も持たない如く神も亦「時」を持ち合はさないであらう「時」を持つものは我我人間の外には無いのかも知れぬ。

## 二十 或平凡

「時」の無い國に會て「時」を経験した人人が、山吹や蓮の莖をお互の手に持ち合ひ乍ら坐つてゐた。自分は彼らに退屈かどうか、愉快はあるかどうかを尋ねて見ようと心がけてゐたが、自分のこの考へは直ぐ彼らに見破られてしまふ不安の方が先立つので、黙つて眺めてゐた。彼らは物憂く動いてゐたが、孰れもその動作に超時間的なゆつたりしたものを



顯してゐた。

自分は味氣なく笑ひかけて見たが、彼らは決して笑はうとはしなかつた。曾て笑つた人も笑はなかつた。彼らは皆一樣に眞面目な顔付をしてゐて、笑ふまいといふ努力などしてゐないやうであつた。

自分は何時の間にか、これらの山吹の枝や蓮の莖を手を持つところの、彼等の中の一人に姿や形相を變へて、石の壇の上のやうなところに腰かけてゐた。自分は實際をかしくも又味氣ないこともなかつた。昏昏としてゐる半睡のやうな状態が永く續いてゐるだけだつた。自分は他のものと話をしたい欲望も起らなければ、他の者の存在意識が少しも自分に影響しない不思議さが打つづくだけだつた。

自分はその時やつと氣付いたことは物を食ひたい欲望の喪失されてゐる、干乾びた状態だつた。その状態に氣づいた時、自分は絶望的にさへ嘆息した。しかしもう自分は遅いやうに思はれた。もう自分はとうに山吹の枝を持ち、彼等の中に坐つてゐたから、——彼ら

の如く何も興味のない顔付で、苦り切ることもできず又燥ぐこともできない、例の眞面目過ぎる状態に壓せられてゐた。



月光的文献



一 喫煙と死

毎月十五日に我我は小さい會合を催した。そして殆ど終夜喫煙を擅にするのだつたが、これはパイプの會と名付けられてゐた。會員には資格はないが一本のパイプを携へることが條件だつた。薔薇の根でつくつたパイプさへ携へば、そして會員の内の誰かの懇切な紹介さへあればいいのであつた。パイプの會であるから珍しい煙草を試煙することは言ふまでもないが、會員は既にマイ・ミクスチュアの濃厚な直ぐ舌の上に重い氣分を感じさせるのに飽いて、寧ろクレプン、ミクスチュアを常用する程になつてゐた。

彼らは嘗に喫煙するばかりではなく、料理をも併せて注文する關係上、上野の或大きな西洋料理店の階上か、或はオオケストラの聞える階下の特別なボックスを選ぶのだつた。ボックスは奇體に急行列車のやうに駢んで、オオケストラの起ると同時に恰も疾走してゐ



る感じを持つてゐた。併乍らこれは大抵會員が酒に酔うてゐる爲に、さういふ感じを與へられるのかも知れなかつた。ともかく可成りハイカラな此會合には主として或同人雑誌の關係者が多かつた。大學生、大學助手、詩を書く男、小説家といふ順序だつた。彼らは酒飲むものがそれに心を傾けるやうに、喫煙によつてそれぞれの心を傾けてゐた。

その晩は十五日のせむか混んでゐて、我我會員の席が漸つと取れたくらゐだつた。勿論音楽は夕方から引切りなしに續いて、街路の電車道では諸の車が動いてゐたことは言ふまでもない、それが女達のゐる控部屋の鏡に映つて、この西洋料理店全體がメリイ・ゴオラウンドのやうに動いてゐた。先にも言つた様に我我は酔うてゐたし音楽は夕方から歇む間もなく續いてゐたし、それに我我は二時間以上も喫煙してゐたから、階上で客同士の喧嘩のあつたことも、すぐ屋後の洗濯屋に小火のあつたことも知らなかつた。我我は我我同士のパイプの壺が段段に熱してくることや、酔と喫煙との過度からお互同士の顔が縦に長く伸びて見える事、舌の尖端に花火のやうな刺戟のある痛みなどをそろそろ感じる頃であつ

た。我我のボックスから勘定場のすぐ前の椅子に、我我に背後を見せてゐる一人の青年が、酒場の方に向ひながら靜かに茶を喫んでゐるのを見た。その後頭から頸、頸からの線が猫背になつてゐるところは我我に親しい友達の誰かによく似てゐた。併し我我はすぐ想ひ出せなかつた。我我同士の誰かに肖てゐるといふ考へを皆口へ出しては云はずに、皆の氣持の中で感じ合つてゐた。

夜が更けるとメリイ・ゴオラウンドのやうな料理店のボックスの中では、六人の會員は音楽のまにまに映畫觀賞家の特異な或感覺に依つて、悲劇中の女主人公を物色するのであつた。彼女らは客の間を縫ひながら又引き返しては、注文書に料理の名前を書き入れる爲に鉛筆を走らせてゐた。

當夜パイプの會員は十二時七分前までメリイ・ゴオラウンドに坐つてゐたから、都合夕方から六時間喫煙してゐた譯だつた。が、彼らの中の最年長者である靱山が顧みた時には酒場の鏡に向ひ背後を見せて坐つてゐた男は、とうにその姿を消してゐた。



## 二月と歴史に就て

千九百十二年六月下流の月のある晩、自分は何の爲か塔の七階目から一度市街の燈火を眺め、更に十二階目から家根の上を見下ろしてゐた。曾て斯様に彼は彼の住む都會を見下ろした經驗を持たなかつた。彼の視界はフィリスチアン、ロツプスの畫面と同様な、奇異な蝙蝠の暗い翼の羽ばたく音を幾度となく耳に入れた。其他の光景は何の誇張もなくロツプスの神秘と惡戯との世界であつた。

暗い屋根裏に錢を算へる老婆や、女の裸の足を嚙る男の珠數つなぎになつてゐるのや、また八度目のお化粧を仕直す女、煙草を拾うて喫む男が義眼を落した騒ぎや、小路の奥の下水に陥ち込んでそれきりで絶命したのや、其他様様の出來事が此千九百十二年代の公園を中心として起つたのである。つづめて云へば千九百十二年代の此公園はロツプスとゴヤ

とを捏き交ぜ、フツクスとモールの寫眞版の複製で一杯だつた。その證據には美しい池の水は夜は石油のやうな虹色をぎらつかせ、それに映るものは可憐な玉乗少女であつた。その可憐な少女を描くことは當時の新しい畫家の好題目だつたに違ひない、——自分ら千九百十二年代の詩人の多くは概ね此痴情ある風景の中で擅に飲食し生長した。あらゆる惡徳をも見遁さなかつた。最も美しい彼女らの中の一人が彼らの上に乗るかかり嘔鳴るのであつた。

「ああ此文なしの畜生。」

塔の上で自分らの發見した「思想」は、遂に神を呪はないところの正しい生活を慾望してゐた。痴情ある風景から田舎の風景の新鮮を思惟するところと一般であつた。そして今日の自分は凡人の一賣文者であり、何れの惡徳にも超然とするところの一紳士の假面をかむつてゐた。しかも今はその塔の上に再び登り彼の生活を俯仰することができなくなつたのである。千九百十二年代の病鬱なる月光が再び我我の上に無いやうに、その公園すら昔



日の「歴史」の中に編纂されるだけだつた。

### 三 月から分れたる者

月から分れて出て来た男は、やはり同様の女と冷たいアスバラガスの料理を食べてゐたが、彼女の指はアスバラガスと同様に白い冷たいものだつた。

### 四 月光的詩人

若し月光的詩人といふ言葉があれば、ボオドレエルやヴェルレエヌはより多き生彩ある月光的詩人であらう。ボオドレエルには病鬱な黄ろい月光を、ヴェルレエヌには明鏡的な同時に詠嘆的な都會的古典趣味を各各感ずるであらう。近代にはアポリネエルやコクトオや、

或はポール・モオランの諸短篇にも各各月光的なる詩人の精神を閃かしてゐる。その外グウルモンにせよ、フランシス・ジナムにせよ、レニエにせよ、新古典へ送り込まれた彼等の孰れも、月光的精神以外の詩人ではない。大掴みに云へば西歐の諸詩人は月か星かの句ひを含まない詩は稀だと云つてよい。彼らは月光をも溶解して製つくられた舶來の石鹼のやうに、時に我我の心腸を洗滌して呉れると云つてよいのである。

今の詩壇でこれらの詩人と比較して匂高い昨日の石鹼に數へらるべきものは、約言すればその月光的精神を生かしてゐるものは僅に詩集「月に吠える」の著者である萩原朔太郎氏であらう。大正五年代以前に萩原氏が既に「月に吠える」と稱する奇抜斬新の命題を撰んだことは、云ふまでもなく何等かの先覺的な使命を、當時にあつて上包を解かれざる新しい石鹼であつたことも實際であつた。當時新しがり私の私でさへ此締りなき散文的な「月に吠える」を餘りによき命題だとは思はなかつた。寧ろ彼が斯様に新しがる程効果のない題意を窺に萩原氏に傳へた程であつたが、彼は深く信據するところがあつたのであらう、



後になつても更めることがなかつた。  
萩原氏が月光的詩人であるとすれば、ボオドレエル型の黄ろく歪んだ屋根の上の月光とでも云つた方が適當であらう。明明皓皓の月光でない限り物凄しい利鎌の如きものでもない。彼は病しげで加之も片雲の間に漏れる黄ろい月光であると云つてよい。——併乍ら彼の詩の中で月光を唄つたものは殆ど稀だと云つてもよい程である。

## 五 活動寫眞の月

明治四十三四年といふ年代に自分は東京に出て、初めて活動寫眞を見物したものであつた。當時にあつては歐洲諸國の文明開化をもつてすら未だ活動寫眞といふものは、人生の數奇多様の生活を現すものではなく、奈何にして自然の美を會得せしむべきものであるかと云ふことに腐心してゐた。ロツキイ山脈や砂漠の映寫は、我我を生きたる寫眞として感

激させたことは云ふまでもない、——二十數年後に「カリガリ博士」や又五年の後に「サルベエジョン・ハンターズ」が表れるなどといふことは、殆ど當時に於て夢にさへ見られなかつたことだつた。——

自分らは楽しい明治末期の活動小屋の中にて、奇異なる文字通りの活動寫眞を見物してゐたことを前以て述べた。しかも自分らはダンスといふものが西歐人の肢體によつて斯くも完全に、斯くも私どもの前に如實の如く踊り演じられることに、又なき好奇の眼を睜つたことは新しい喜びでもあり驚きでもあつた。當時は月光の中から瞬きしてゐる間に、數人の女が羅布を纏ひながら、嫣然として我我の面前で踊り続けるのであつた。彼らは月光から分れて出たもののやうに美しい長い手足を素早い動作によつて左右にヘシ曲げ、或は飛上つたりするのであつた。月ばかりではなく花束や或は星の群からも、手品師の扇からも、卓の上の煙草入れからも、舞うてゐる胡蝶や小鳥の籠や手帕の皺からも、殆ど總ゆる物體の化身のやうに彼女らは舞ひ出てくるのだつた。しかも夫等の花や月から女が出る



前には、必ず一人の奇怪な悪魔が、絶えず畫面の中を指揮し彷徨してゐるのだつた。當時自分は映寫中の一美人が嬌乎と微笑する時、何となくきまり悪い思ひをし、そして何となく羞恥の情や赧面の面持をしたことは、強ち年少な好色にのみ耽つてゐた譯ではなく、餘りに我我の眼に近く物言ふごとく、囁くごとく、現れ踊つたからであつた。自分は永い間艶美で露骨な西洋人の微笑に惱まされてゐたのも、これらの映寫中の美人が物言ふごとく、迫つてゐたからである。

## 六 上田秋成

上田秋成もまた月光的詩人であらう。

「浅茅が宿」や「青頭巾」や「蛇性の姪」の物語には、軒漏る月かげでなければ、蔭をつくる物凄しい月が射してゐる。或は彼らしく清閑の月がほのかに照してゐる。西行も月の大

家であるとしたら亦芭蕉も月の大家でなければならぬ。亦秋成も大家の外のものではない。彼の文章の中に何か仄かな月のあかりが漂ひ、不斷な「浅茅が宿」をあらはしてゐる。

### 初 秋

月あかき夜を誰かはめでざらん、ふん月望のこよひ、庵を出て、わづかに杖をひけば、鴨の河面なり、雨ふらぬほどなれば、月は流を尋ねやすむらん、音をしるべにとめくれば、むべも清しとて、人々手にむすび、かいそうぶりなどして遊ぶ、風高く吹き、雲消え、影さやかにて、何をか思ふくまあるべき、——（藤篋冊子）

十日あまりの月は峰にかくれて、木のくれやみのあやふきに、夢路にやすらふがごとし。（兩月物語）  
やよひの望の夜ごろ、かすみながらに、夕かけて月いと花やかにさしのぼりて、庭の梅が枝に先かかれる影の、花の色あらそふは、似て物もなくあはれ也。（つらふみ）

## 七 古く月



芭蕉は月光の大家であるよりも、月の大家とあると言つた方が適當である。月光は後代の新體詩人に冠すべきであるが、芭蕉は單に月の大家であらう。しかも芭蕉の月の句は彼の英才を以てしても、大して新しくはない、と言つても決して古くはない。その句の殆ど總てに前書があり、偶吟といふよりも紀行や題意に叶うて詠じたものが多いやうである。「三日月や葬の夕べつぼむらん」旅中の吟「佛や嫉ひとり泣く月の友」悼遠流天宥法印「其の玉を羽黒へかへせ法の月」燈山「義仲の寢覺の山か月悲し」稍晩年の作「秋もはやはらつく雨に月の形」等枚舉に暇がない。みな古風な、それ自身月の面影を持つてゐる。芭蕉は或は月の大家ではないかも知れぬ。彼はそれ以上の明明暗暗たる何者かであらう。或は蒼古二百年の古い月かも知れない。――

## 八 月光的感情に就て

私は所謂月光派の詩人でもなければ、又特に古い月を詠むところの俳人でもない。併乍ら私の文學的生涯の過半には、いみじき月影は不斷に射してゐたに違ひないやうである。今も私の喜怒哀樂の夕には或は月光以上の明りが射し込んでゐる。私は今は西行のやうに月見れば悲しむといふ古への思想を輕蔑してゐるものに近いかも知れない。――日本に於ける總ゆる和歌や發句道の精神はこの月に事寄せて哀歡の情を述べたものであつたが、私は却てこの古き歴史と文學の脊景とをもつところの月光に、直ちに情を述べる文學に賛成することができないやうである。萬葉集や元祿俳人の詩的精神、ボードレエルやヴェルレエヌの哀調を育て來たことを思へば、後代の月光も亦別様な文學の榮光を生みつけるであらう。併し月に事寄せる文學は今のところ行き盡いてゐることも實際である。殆ど洗ひつくしたと云つてよい。

高山樗牛が月夜の美感を書いたころは、今から二十年も昔であつた。空虚な文字ではあつたが當時にあつては私は愛讀したものであつた。彼には彼の熱情に依つて仄かに射すと



林泉雜稿

ころの月光があつたことを私は記憶してゐる。徳富蘆花や尾崎紅葉もまた月光的新派の旗幟を持つてゐた。尾崎紅葉は何かしら一月十七日の月光を自分に印象させたことは、未だに可笑しい記憶を残してゐる。



## 一 憂鬱なる庭

春になつてから庭を毀すことが最初の引越しの準備であるのに、一日づつ延期してゐるうちに芽生えが彼處此處に青い頭を擡げ、一日づつ叡山苔の緑が伸びて行き、飛石のまはりに美しい緑を埋めてしまふた。樹や飛石、石手洗なども國の庭へ搬ばねばならなかつたが、芽の出揃うた鮮かさにはどうしても壞す氣にならなかつた。愛情といはうか、執着と言つたらしいのか、ともかく自分は一日づつ延期しながらも、早く庭の物の始末をつけたい氣持を苛立たした。隅の方にある離亭も取毀して送らねばならなかつたが、大工や人夫の入亂れる有様、切角の芽先を踏みにじられることを思うて見ても、直ぐ取毀ちの仕事にかかる氣を挫かれ勝ちだつた。國の方の庭にこの離亭を移すと、國の俳人が月に一回ある筈の運座の句會に此離亭をつかふことになつてゐた。大工等もその事で人を仲に入れて問合



せて來たりしてゐるものの、氣乗りのしない幾らか悒鬱になつた自分は、春雨の美しく霽つた叡山苔の鮮かさに見惚れながら、すぐ運送の手順に取懸かれさうもなかつた。自分は茲二年ばかりの間に「庭」を考へることに、憂鬱の情を取除けることができなかつた。或時は自分の生涯の行手を立塞がれるやうな氣になり、或時はさういふ考へを持つときに、何か後戻りをする暗みの交つた氣持を経験するのだ。愛する樹樹や、石のすべてが何か煩さく頭につき纏うて、夜眠つてゐても其眠りをさまたげられるやうで不快だつた。自分は心神の安逸を願ふときには努めて草木庭園のことを考へないやうにしてゐた。自分は頭の痛む午後や、變に昂奮してゐる時などに、石や草木の幻のやうなものに取つかれ、脳に描く空想を一層強く締めつけられて來るのだつた。夢にうなされ晝は晝で疲れ、草木や石はそれぞれに何か宿命や因縁めいた姿で纏ひつき、鋭い尖つた枝枝が弱つた神経に障つてくることも珍しくなかつた。自分はかういふ境涯から離れたい爲に、つとめて自然の中に、庭園のまはりに近寄らないようにしてゐた。

併し自分のさういふ息苦しい思ひの中でも、習慣になつてゐるのか何時の間にか庭の中に出て、樹や石を愛し弄ぶの情を制することができなかつた。頭の痛むなかに伸びて尖端を觸れて來る樹樹の姿は、一層親密な運命的な勢力を自分の肉體の中にも揮ひ、自分は傷ついた氣持で殆ど引摺られるやうな状態で、これらの樹木や石に對ふより外はなかつた。かういふ珍しい氣持はあり得るものであらうか。

## 一一 「童子」の庭

自分が此家に越してから八年ばかりになり、三人の愛兒を得、その一人を最初に亡くしたのも此家だつた。自分の亡兒を想ふの情は五篇の小説と一冊の詩集になるまで哀切を極めたものだつたが、併し誠の愛情には未だ觸れるに遠いやうな心持だつた。自分は「童子」といふ小説の中に可憐な一人の童が、夕方打水をした門のあたりに佇んで、つくづく表札



の文字を読むあたりから書き始め、時を経て、「後の日の童子」といふ作の中には、到底何物にも較べがたい自分の毎日の物思ひの中に、何時の間にか生きて一人の童子となつた彼を描いて、殆ど書き疲れ飽きることはなかつた。亡兒の事を書くことはそれ自らが、愛情の外のもので無いため、書くことに依つて濃かな愛情のきめを感じるのだつた。

自分は二十篇餘りになる詩をつくり、寧ろ綿綿たる支那風な哀切を盡したのも、その亡兒への心残りの切なることを示したものだつた。亡兒と「庭」との関係の深さは「庭」へ抱いて立つた亡兒の俤は何時の間にか竹の中や批把の下かけ、或は離亭の竹縁のあたりにも絶えず目に映り、自分を呼び、自分に笑ひかけ、自分に邪氣なく話しかけ、最後に自分の心を搔きむしる悲哀を興へるものだつた。或日の自分は埒もなく疊を搔きながら死兒を慕ふの情に堪へなかつたのである。

さういふ「庭」は自然に自分の考へをも育てる何者かであり、その何者かを自ら掃き清めることは喜びに違ひなかつた。自分はさまざま樹木や色色な花の咲く下草、亡兒の通

ふ小さい徑への心遣りをする爲、冷たい動かぬ飛石を打ち、其處に自身で心を待設けるところの淺猿しい人生の「父親」の相貌を持つてゐた。單なる樹木は樹木でなく「子供」に關係した宿縁的なものだつた。庭を掃清めることは彼への心づくし、彼への供物、彼へのいとしい愛情、彼への清い現世的な徳と良心の現れだつた。自分は老いて用なき人のやうに庭に立ち、石を濡らし樹樹の蟲を捕除いたりするのだつた。事實自分の妙に空想的になつた頭の内部には、それらの庭の光景は亡き愛兒の道みちよふ園生のやうに思はれ、杖を曳いた一人の童子を何時も描かない譯にはゆかなかつた。自分の悲むで鶴の如く叫ぶ詩の凡ては毎日その一二枚あてづつの原稿紙に書かれて行き、自分が初めて詩の中に分身を見、詩中に慟哭したのも稀な経験だつた。

その詩や小説の中にある自分の悲哀とても、本當の突き詰めた氣持の中では到底さういふ藝術的な表現では決して満足されるものではなかつた。藝術の様式は遂に藝術以外のものでないところに、未練深い現世的な自分の愛慕が低迷してゐた。



自分が天上の星を見直し或は考へ直したのも、その悲哀の絶頂にゐた頃だつた。深い鬱曲された層の中にある生涯的な悲哀は、毎日自分に思ふさま殆ど人間の悲哀性の隅へまで苦苦しく交渉し、「烟れる私」をつくり上げるのだつた。顔の色の益々悪くなつた自分は決して笑ふといふことを、何物かに掠め奪はれてゐたも同様の空しさで、自ら烟れる如き凄しい顔容をしてゐた。

### 三 季節の痴情

自分は決して値の高い植木や石を購うた譯ではなかつた。寧ろ若木を育てた位で、高價な大物は植ゑなかつた。些し許りの詩の稿料や他の小使錢を四季折折に使つた外は、殆ど餘財を傾けることはしなかつた。貧しいその日暮しの中から集めたものだから、賣ることになれば端錢にもならなかつた。と言つて此儘他人に譲り渡す氣にもなれなかつた。何故

かといへば自分の愛園だといふ名目にしては餘りに貧しい木石の類だつた。せめて相應の石一つくらゐでもあればいいが、雜石をつかつた庭を他人に手渡すことは、末代までの名折であり、さういふ恥を残すよりも一草一石の端にまでも原形無きまでに取毀すことが、本統の自分の氣持だつた。

若し愛してくれる人があれば、この儘譲り渡してもいいと考へたこともあるが、後に残ることを考へると憂鬱になり、矢張り壞すことに心を決めるのだつた。それが自分の一つの徳義でもあり良心でもなければならなかつた。自分を訪ねたことのある人人の眼に残つてゐる小さな庭、庭らしい風致の中にある自分が、それ以上にその人人へ呼びかける必要はなかつた。潔く取毀つて又新しく移らなければならぬ――。

自分が此庭を考へたことの最も烈しかつたのは、震災後一年を故郷の山河に起居してゐる時であつたらう、その時は庭などいらない氣持だつたが、安つばい郷里の貸家には砂礫が土に雜つてゐて、何を植ゑても根をおろすことがなかつた。柔かい黒土のある東京の庭



を思ひ出したのは寧ろ不思議な思ひ掛けない切ない氣持だつた。自分は家の者に何かの序に季節ごとに庭の話を繰返しては話出し、殆ど見るに耐へない庭があれ程心に残つてゐることは、意想外な氣持であつた。

歸京して見た昔の庭は庭のままだつたけれど、愛情は昔に倍してゐると言つてよかつた。彼等は穩かだつたし又靜かさは一入深かつた。自分の最初に氣のついたことは庭の全面に漂ふ憂愁の情だつた。主人なくして過した一年の間に、彼等は茫茫たる十年の歳月を負つてゐる荒涼を持つてゐた。それは人間的な愛情だと言つていい位の靜かな重い荒れ様だつた。自分が彼らの間に立つたときに自分を締めつけるものの多くを感じ、嘯くものの哀切を経験するのだつた。自分は僅かな一草の芽生えの中にも自分が六七年近く愛した情痴を感じた。全く庭を愛することも、文に淫することも凡て情痴に近いものだつた。さう言つても解り兼ねるかも知れぬが、實際人間同士の情痴以上の、重いものに心を壓せられることは愛する女以上の痴情に似たものだつた。自分が彼等の世界に住むことに頭を痛め心を

暗くしたのも、それらが最早苦痛に近い楽しみであることも、やはり清淨であるために憂鬱になる情痴の表れに違ひなかつた。

#### 四 田端の里

自分は殆ど庭の中に隈なきまでに飛石を打ち、矢竹を植ゑ、小さい池を掘り、郷里の破にある石を搬び、庭は漸く形をつくつて行つたが、間もなく郷里にも庭をつくりかけた關係上、郷里の方にも庭木を送らなければならなかつた。さまざま煩雜さに疲れた自分は一層此庭を壊し、庭のない貸家に引移りたい望みを持つやうになつてゐた。何故かといへば愁に庭のある家に居ればそれに頭をつかふことは當然なことであるから、一層庭のないところに行けば諦めもするし、樹や石を弄ぶことも自然なくなるであらう、さういふ考へで何處かに荷物の全部を預け一家こぞつて旅行に出る計畫を立てたのであつた。併し自分



の執着はすぐに庭を毀す決心はしてゐても實行は益益遅れがちになつてゐた。自分が此田端に移つてから既う十年になるが、「江戸砂子」にある生薑の名所である田端の村里は文字通りの田舎めいた青青しい生薑の畑と畑の續いた土地だつた。根津の町へ出て藍染川となる上流は田端の下臺にあつたが、音無瀬川と呼ばれてゐた。名に負ふ煤と芥の淀み合ふ音の無い小川であつたが、それでも今の谷田橋附近は大根や生薑の洗ひ場になつてゐて女等の脛も見られる「江戸砂子」の風俗と傳とを昔懐かしく残してゐた。今の神明町車庫前あたりから上富士への坂の中途迄、秋風の頃はさわめく黍畑や里芋の畑の段段の勾配をつくり、森や林も處處に圓い丘をつくつて見えてゐた。小川や清水の湧く涼しい林もあつたが、今は待合や小料理屋が町家を形づくり、昔の武藏野の風情は殆ど何處にも跡をとどめてゐなかつた。

それでも音無瀬川の溝石の仄ぐらい濕りには、晩春初秋の宵などに蛙の啼く聲も聞かないではなかつたが、若い椎の植木畑や生薑の畑には昔のやうな螢の飛び交ふ微な光りさへ

見られなかつた。十年の間に變つたものは單にこれらの郊外的な風致や町の姿ばかりではなく、兒を失ひ悲むだ自分には溝川のほとりを散歩しながらゐる姿は昔のやうだつたが、もう子供が二人も生長してゐた。

植木屋の多い田端の地主らも時勢と金利の關係から、植木屋は賣減らしにして何時の間にか貸家を建て、新建の小路をつくり、殆ど空地は見られない程だつた。秋口には涼しい高い木に啼く蟲の類も減つたばかりでなく春先の鶯が啼く朝などは年に一日か二日くらゐに過ぎなくなつた。以前は何處からともなく春を告げる鶯の聲を聞くのは、毎朝の快いならひであつた。生温かい雨の霽はらつた朝の食卓についてゐて、鶯を聞かない朝はなかつた。それなのに今年には鶯を聞かなかつたといふ年も近年になつてから折折に聞くやうになつてゐた。



## 五 記録

自分の家や庭の客となる人人は、矢竹の茂りと音とを賞めてくれたが矢竹は庭一面に出して相應の風致を形作つてゐた。一年の間に主人を三人まで持った秋といふ女中も、自分の家を出ると不幸續きの暮しをして今では行方が分らず、彼女が風呂敷に包んで買つて来た小さい沈丁花は、六年の間に自分の背丈を越えるまで伸びてゐた。次ぎに来た女中の里である茨城の草加在の珍しい土賊の株も、庭の一隅に固く組み合うて、年年殖えて美しくなる一方だつた。彼女は自家から暇を取るとカフェの女になり、これも亦行方が分らなかつた。

季節折折の子供の病氣の時の看護の女、植木屋が入代つてゐたそれぞれの記憶、國の母や兄、老俳友などの泊つたことのある離亭、飼猫や飼鳥の山雀、或時は仕事に疲れて卒倒

しかけたことのある庭の奥、さういふ小さな覚えは一つとして「庭」を離れたものではなかつた。「庭」は彼らしい人生觀めいた記録的なものを持ち、それらが今庭を壊さうとしてゐる自分に小癩なほど叙情詩めいた詠嘆の心を移さうとするのだつた。殆ど隅隅にまで手の觸れないところの無い庭土は、それに手をつけた日の記憶的な位置を今更らしく思ひ出させた。

この家に来て自分の仕事をした數は、文字通り枚擧に暇が無いくらいだつた。詩集「高麗の花」や「田舎の花」「忘春詩集」を書き、「童子」「嘆き」「押し花」「人生」「我こと人のこと」「わが世」等で亡兒に對する嘆きの限りを綴つたものである。その他數十篇の小説物語の類は自分でも覚えてゐない夥しい數だつた。どこの雑誌に出たかも分らず、それを捜し出すこともできないで散逸された小品隨筆の類は、殆ど數限りのない位だつた。さういふ反古同様の仕事に注いだ自分の制作的な情熱を考へるだけでも、自分は何か目當もなく茫然とし、その情熱の費消によつて十年は命を縮めてゐると言つてよかつた。それすら



自分には何一つ残つてゐないことを考へると、情熱を賣買した天壽の制裁の空恐ろしさを思はない譯にはゆかなかつた。

自分は第一流の文人である自信はあり實力もあるのだが、併し自分の書いたものが秋風の下に吹晒され、しかも残らないことを考へることは苦しかつた。自分にさへ其行衛の判らない原稿のことや雑誌のことを思ふだけでも陰鬱になり息窒る思ひだつた。その頃に書いたものの心の持ち方の低さ、氣持の張りの足りなさを考へると訂正削除の朱筆は動かしてゐても、自分の文章や意嚮の拙劣さを犇犇と感ぜられるのであつた。或は却て原稿が散逸された方がよかつたかも知れない。悪文十年の罪を失した宜い機會であるかも知れぬ。唯自分はそれらにまいた取り返しのかぬ情熱の濫費だけは何と言つても一生の過失だつた。どういふ時にもよい仕事をするには、永い安心を形づけるものであり、朝朝の寢ざめを清くするものであるが、いい加減な仕事をした者の末路は自分で氣の附く時は、もう遅いに違ひない、併しその遅い時期に踏止まることも亦肝要なことに違ひなかつた。

## 六 別れ

自分は或日、まる一日外出をする機會があり、その間に植木屋に命じて樹木の幾株かを荷造りさせて、國へ送るのであつたが、幸ひ自分の歸宅したのは夜に入つてからだつたから、其樹木を抜いた跡は見ないで済んだのである。次の日にも外出の折を見て飛石を抜き又次の日にも石を撤ばせるように命じて置いて何時も夜になつてから歸宅するのだつた。雨戸を開けることがないので、庭の様子は分らなかつた。寢床で想像する淋しい庭のありさまは誰かを怨みたい氣持だつた。

築庭造園は財を滅ぼし、人心に曲折ある皺を曇み込み、極度に清潔を愛する者になることは事實である。自然に叛逆することは、自然を模倣すると同様な叛逆だつた。彼は「庭」を造らうとしながら實は「自然」を造らうとするものらしかつた。そこに何か突詰めると



浅ましい人間風な考へがないでもなかつた。それだから面白いといふ築庭的な標準は、自分には既ら亡びかかつてゐる考へであつた。それなら自分は後の半生を何に費したらいいだらうか？——自分の如きものの才能は何に向つて努力すべきだらうか、かういふ消極的な問題を自分の中に持出して、自分は荒れた破壊された庭の中を歩いて見たが、何か永い間に疲れたものが抜け切つたやうな、それこそ精神的な或平和をさへ感じるものであつた。その感じは自分を一層孤獨な立場に勇敢に押出してくれ何よりも平穩と潤達とを與へて呉れた。小さな風流的な躑躅から立ち上つた自分の行手は、寧ろ廣廣とした光景の中に數奇ある人生的な庭園を展いて見せてゐた。自分はその庭園を見ることに泉のごとき勇敢を感じた。自分はそれ故今は眼の前で此小さな「庭」の壊されることを希望し、過去の庭園に靜かに手を伸べてその姿に別れを告げるのであつた。

## 七 曇天的な思想

何時か自分は「過去の庭園」を物してから、庭を壊し離亭を取毀したが、いまは一草一木も無くなり、明るい空地になつて了つた。自分の氣持は爽快になり頭は軽くなつた。矢竹も掘り盡したが筍が處處に餘勢を示し、垣根に添うて残つてゐる。

自分は庭を壊して見て埋られた飛石は勿論、凡そ石といふ石の數の多いのに驚いた位である。雜石をあしらひ急仕立に自分の氣持を紛らはしたその折折の、自分の氣持の低さは熱熱呆れるばかりだつた。庭などといふものは決して間に合せの石や樹を植ゑて置くものではない。それは必ず棄てなければならぬ時期があるからである。周到な注意と懇切な愛好の下に、生涯それらの木石に心を寄せるほどのものを選ぶべきであつて、いい加減な選擇は嚴格に退けるべきであつた。



自分は庭を壊しても決して淋しい思ひはしないばかりか、何か前途に最つと好い庭がありさうに思へるからである。庭はそれ自身が東洋の建築としつくり色を融け合せて生きてゐるもので、決して庭だけで生きてゐるものではない、東洋の寂しい建築と其精神とに彼は其姿を背景とせねばならぬ。建築の淋しい哀愁を勉るものは、女人のやうに優雅な、しかも健康な「庭」でなければならぬ。誠に美しい庭に立つことは我我の愛する女人と半夜を物語ることに、どれだけも隔つてゐるものではない。

自分は梅雨曇りが廣がつてゐる中に、毎日のやうに其美しい曇天を眺入つてゐた。その中に壊された庭を少時思ふに適した。折折の低い雲、蒼い空をも眺め、どうやら自分がこれから後にめぐり會ふべき、石や木、庭のありさまなども好き想像のうちに描くことができた。そして自分は半年ばかり極端に質素な、往昔の文人が試みた旅行のやうなものを實行するために、家具を友人の家に預け、永年の埃や垢を洗はうとするのである。文人の榮華の醒めた不況の時に昔の生活を抛つことは、自分の好みにもあひ、今はその「時」を得

てゐるからである。それ故自分は曇天の中に美しさを知ること、人一倍の熱情を感じるからである。

自分のやうな人間は何かしら「心」で翻弄する物の要る種類の人間である。詩や詩情をいぢることにも倦きてゐないが、同様に戀愛にも未だ飽きてゐない、戀愛的な雰圍氣は決して女人の間にはかりあるものではなく、その正確な精神は凡ゆるものの美しさを詳かに眺め取入れることであらう、曇天も陶器も又女人もその内の重なるものであらう。

荒土になつた庭の上に、杏の實が、今年もあかあかと梅雨曇りの中に熟れてゐる。此杏は家に附いてゐる樹であるが、毎年春は支那風な花を見せ、何時も今頃の季節には美しい實を見せてゐた。今日も机の上から見る朱と黄とを交ぜた杏の實は、堪へがたい程美しい。自分も家の者もこれを取らうとはせず、此儘次ぎに越して來る人の眼を樂しますであらう。

杏は國の方にも今頃は熟れて輝いてゐるが、東京では滅多に見られない。何時か小石川



の或裏町で見かけたことがあるが、その美しさ豊さは莫大な印象だつた。子供の時にその種子を石で磨つて穴を開け、笛のやうに吹いたことを覚えてゐる。「杏の笛」と言ふと幼い詩情を感じることが夥しい。今も郷里の童子はその「杏の笛」を吹くことを忘れないであらう。

矢竹は國の庭へも送つたが、根は庭ぢうに這ひ亂れてゐた。森川町の秋聲氏からの使ひにも數株を分けたが、使ひの植木屋はかういふ美しい竹は植木屋も持つてゐないと褒めてゐた。自分もさういふ褒言葉を喜ぶものである。初め辻堂の中村氏に約束をしたが、辻堂までの車を仕立てることは困難だつた。中村氏の庭を訪れた秋聲氏との間に竹の話が出たものらしかつた。

自分は初め此矢竹を青山といふ禪客から譲り受けたものである。今度は色色手分けして頒けたが、雨が多く分け切れなかつた。關口町の佐藤君からの植木屋も、漸つと今朝になつて分けた竹を掘りに來た。ともあれ自分は後二日で半年の旅行に出るのだが、あとを亂

したくないので土の穴や掘り返しを埋めさせてゐて、微妙な哀愁を感じた。多くの秋と冬の夜、これらの竹の葉擦れの音を聞いたが、春の深いところと晩秋の頃とが一番葉ずれの音がよかつた。皮を剝いで膏で拭いた幹は青く沈んだ好い色をしてゐた。芥川君は此竹のある方を何時も「窓の穴」と言つてゐた。同君の庭にも竹があつたが二三日續いて庭を掃いて見て、氣持がよかつたといふ話も耳に残つてゐる。――

震災の時にも上野あたりからの灰が吹かれて、葉の上に白く埃をためたが、さういふ思ひ出も却却忘れられなかつた。自分は毎年筍が出ると、古竹を粗い簾に編ませ、それを煤の垂れる軒に吊るして置いたが、野趣があつて粗雑な感じではあつたが好きだつた。

## 八 壽齡

この春母の危篤の報を得て遙遙と歸國して行つたが、母は七十八の高齡の中で死生の間



を往來してゐた。自分は母が二三日のうちに絶命するであらうと思ひ、人として數奇な彼女の生涯と運命とに就て、絶えず頭をつかひ兎も角も死ぬことを氣の毒に思ひ、自分も出来るだけの藥餌の秘術を盡すように努力するのであつた。彼女を支配した運命はその晩年に物質的な苦衷を興へず、自足と平安とをのみ温かに恵んでゐた。自分は父の死の前後が斯様に平安で無かつたことを考へ、いぢらしい父への思ひ遣りを切ない氣持で顧みない譯に行かなかつた。

四五日の後に母は急性肺炎の症狀から完全に救はれ、運命の情勢は再び母を安逸な生活の中に取殘すもののやうだつた。彼女は粥を啜り魚の肉を食べ潑刺として餘生を盛り返して來た。自分は七十八年も生延びた彼女の止みがたい生活力が、その餘勢の上で舞ひ澄む獨樂のやうに停ることを知らないのを恐ろしく思つた。血色を取り戻した一老母の戦ひは遂に現世的生活へまで再び呼戻され、暴威を揮ふ時は揮ふ苛酷な運命さへ、母の前ではその暗澹たる翼ををさめてゐると自分は思つたが、さういふ母を見ることは別な意味で壯烈

な氣がしないでもなかつた。

母を圍繞する人人及び古い昔の彼女の知合の悉くは、母が今度は死ぬであらう豫測と天與の壽齡とに、寧ろその長命と平安とを祝福して、自分に一一その由を傳へて挨拶を交すのであつた。自分も母の壽命の終るの近きを思ひ、働く能力を缺いた人間は決して六十以上は生きる必要の無いといふ、漠然とした通俗的な概念を得たのだつた。六十以上生きるといふことは死を期待され、死を祝福されるのみで、死を激しく傷み悲しまれることは尠いことらしかつた。ことに田舎の人人の卒直な言葉は一つとして死を哀傷する情を披瀝せず、不足のない死を、或は死そのものに利子的な計算を敢てすることにより、恰も當然訪れるべき死の遲きを皮肉るやうなものだつた。

母は自分に決して今度は生き延びたくなかつた事、唯ひたすらにお詣りがしたかつた事、再た御身らに厄介になることが心苦しい事などを、取盡した靜かな生活の中から物語るのであつた。自分は何よりも運命がまだ彼女を犯さなかつたことに就て、ひそかに運命の力



が近代に至つて次第に稀薄になつてゐるやうに思はれてならなかつた。そして病室の窓の外にある執拗な一魂の残雪は、北に面した杏の古い根にしがみつき、世は春であるのに凝り固り却却消えようとしなかつた。残雪と運命、さういふ昔の文章世界の寄稿家の物するやうなことを考へ、我が尊敬すべき運命への超越者、自分の母親を熟見守るのだつた。

## 九 邦樂座

久振り仕事も一先片づいて、冬がこひを施した樹樹の蓆を解いて見たが、彼らは藁の温さの中に既に春の支度を終へてゐた。何か酸味を帯びた匂が自ら立つ埃とともに、自分の胸を妙に惱ましく壓してゐた。自分は少時日の當る土の上に踞んでゐたが、昨日邦樂座の玄關の段の上から流れ落ち、背中を打つた重い痛みが斯ういふ明るい日さしの中で餘計に感じられた。

何時か雨上りの電車で轉んで危く轢かれようとしたが、さういふ不慮の出来事の起るときは、頭がひどく疲れてゐる時に違ひなかつた。健全だと思つてゐる頭脳も刺戟のある映畫見物の後には、毎時も烈しい疲労を心身感じてゐた。目まぐるしい電車で立竦んで、少時頭の働きを待つやうな状態になる時は、頭脳の働きよりも車や往來の烈しさが迅速に感じられるのだつた。或晩自動車から下り立つた自分は初めて帽子を冠つてゐないことを知り、自動車を見返るともう明るい街巷の中に紛れ込んでゐた。自分は帽子を冠らないで歩く、無態な頭に何か締りの無いことを感じた。——昨日も邦樂座で危く頭を打てば或はそれきり腦貧血を起したかも知れなかつた。人間の命を落すやうなことがどれだけ自然に何等の注意力の無い時に起り、それが却つて偶然に救はれてゐることがあるかも知れなかつた。

庭の中は眩しい春の日當りで一杯になり、竹の葉の上にあぶらを注いだやうな一面の光だつた。自分は自然の美しさを感じ、その自然がもう自分の心身にカツチリと填つてゐる



人生的な或事件でさへあるやうな気がし、自ら感情的な此事件を懐しむの情に耐へなかつた。かういふ物の考へ方をする自分には、最早花や樹の美しさよりも自分の考へに思ひ耽る美しさが、どれだけ事件的なことを撥ぶかも知れなかつた。自分は身に沁みて人の死を感じ、その死を自ら企てた人のことも斯ういふ春光の下で餘計に沁沁感じられた。現世の美しさを深く感じることは死ぬことに於て、一層美しく見えることに違ひなかつた。現世に執着するほど死にたくなる念ひを深めることは、よき魂をもつた人間の最後の希望にちがひない——生活、金、死、女、そして目前に迫る何かの芽生えの状態に、折折氣を取られながら殊勝に少時靜かにしてゐたが、昨日の背中のいたみは鈍重に徐ろに自分に影響してゐた。女達の華かに立つた光つた階段から墜ちた自分は、單に階段から落ちたばかりではなかつた。或はその時に當然不幸な運命の逆襲に遭ふべき自分が、その又運命の端に繋がつて怪我をしなかつたのかも知れなかつた。邦樂座の大玄關から自分は死の何丁目かへ送られる筈はないと思うたものの、自分は常に新鮮な運命に立向ふ用意をせねばならない

と考へるのだつた。それは自分ばかりではない、凡ゆる人間がいつもその準備に就かなければならない事だつた。何時どういふ不安と不詳事が待ち構へてゐるかも知れないからだ。誰がその不慮事の前に立ち得ることができよう。——

## 十 短冊揮毫

自分のところへも毎月短冊や色紙の揮毫を迫る人が多く、氣の進まぬ時は一方ならぬ憂鬱をすら感じてゐる。平常何も知らぬ人に自分の惡筆を献上することは、最早自分には神經的に嫌厭を感じてゐる位である。千葉縣の某と云ふ人などは先に短冊を送り到けて置いて、毎月揮毫の督促を根氣よく殆ど一年間續けて行つてゐた。その最後に短冊返送を迫ることは勿論、或は謝儀を送るとか云ひ子供でも宥め賺すやうであつた。併し自分は怒りを噛み潰してゐた。かうなると脅迫的なものに近いやうである。



自分は短冊色紙の送り付けは其儘即座に返還してゐる。今後奈何なる意味に於ても揮毫はしないことにした。その爲自分のやうな悪筆の品定めされる後代の憂を除きたいと考へてゐる。併乍ら自ら進んで書きたい時があれば、悪筆を天下に揮ふことの自信も無いではない。欲しきは私に取つて何事も勇躍だけである。

## 十一 「自叙傳」

自分は此頃もう一度今のうちに書いて置きたいと考へ、自叙傳小説を書き始めた。自分は處女作で自叙傳を書いて制作的に苦苦しく失敗した。それは言ふまでもなく詩的雜念の支配を受け、センチメンタリズムの洗禮を受けたからである。自分は嘘を交ぜた、いい加減の美しさで捏ねた餅菓子のようなものを造り上げ、それで自分は自叙傳を完成した如き氣持であつたが、此頃の自分にはその嘘が苛責的に影響し、苦痛の感情を伴うて來たのであ

る。自分は暇を見て書き直した上、少しも文學的乃至詩的移入のない自傳の制作に従はなければならず、事實その仕事に打込んでゐた。

自叙傳は作家の最初に書くものでなければ、相應の仕事をした後期の仕事でなければならぬ。その仕事は何處までも成年後の彼の見た「生ひ立ちの記」でなければならず、峻烈な自分自身への批評に代るべきものでもあらう。

## 十二 「大槻傳藏」の上演

帝國ホテルで自分の作「大槻傳藏」の道化座の公演を見て色感心した。僕の戯作は幸か不幸か未だ公演されたことはなかつた。又自作が劇評家等の筆端に觸れたことも極めて尠いことだつた。自分はこれらの戯作が作集や叢書にさへ未だ談判を受けたことすら無いのを、大した不名譽に思つてゐないものである。それに據つて自信を逆振ちにする程拙



の心を有たない僕は、今度自作の公演を見に行く氣持の張方は、少少悲觀的でもあり又眞向からの自信では可成餘裕を持つてゐた。

「大槻傳藏」は自作の中では唯一つの時代劇でもあり、或程度までの用意はしてある作品である。その公演を見て「大槻傳藏」が歌舞伎や帝劇で上演されないことを不思議に思ふ位、成功してゐた。道化座は無名の劇團であり大槻傳藏を演じた市川米左衛門氏は、その道の通でない自分には新しい名前である。玄人らしいところはあつたが自分には好印象を與へた。自作の場合大抵役者を貶すことがその批評の眼目であり條件である世の中で、自分は或程度までの満足をして見物した。かういふ自分を素人として笑ふものがあれば、それは物の素直さをわきまへない人人であらう。——自分は此劇を見物してゐる間、絶えず漫然として劇を書いてゐた自分が振顧みられた。必然性無き會話の受け渡しも目前で諷刺された位だ。自分は一層努めねばならぬ事、氣持の張方を少しも弛めてはならぬ事を忠告されたやうなものであつた。これは自作が最初に上演されたためであらう。

### 十三 茶摘

自分の家の庭は廣くはなかつたが、茶島が少し残つてゐて季節には茶摘みもしたものだつた。李の樹の下に蓆を敷いて母は煙草盆を持出し、まだ小さかつた妹は茶を用意したりした。自分も茶摘みの手傳ひをしたが、一時間も同じい事を繰返す仕事には直ぐ退屈をし、風のある日は摘んだ茶の新葉が吹かれてよい匂ひがした。

茶の根には古い去年の茶の實がこぼれ、僅な枯葉の間に蔭の芽が扭れて出てゐた。母は退屈しないで丹念に摘んでゐたが、自分の摘む芽の中に古葉さへ雜つてゐて、臺所でそれを蒸しては藪の上でしごいてゐる姉から小言が出た。臺所は湯氣で一杯だつた。姉と雇の婆さんとが忙しく立働いてゐた。自分は茶といふものに恐怖を感じる程、摘むことに飽飽してしまつた。かういふ時に必ず誰か近くの母の友達が表から聲をかけ、母はうつ向いた



まま返事をしてゐる記憶があつた。又定つて強い風が出るやうな日が多かつた。蒸された茶は餅のやうな柔らかい凝固になり、揉まれると鮮かな青い色を沁み出してゐた。その蒸を乾かしたあと、四五日といふものは矢張り茶の芽の匂ひがし、その匂ひは庭へ出ると直ぐに感じられた。二番茶を摘むころは日の當りが暑かつた。じりじりと汗を掻く母を見ることは、氣苦勞できらひだつた。

#### 十四 朝飯

或初夏に伊豆の下田の旅籠屋に泊つて、その庭に桃に交る僅な緑の芽立を見たことが忘れられなかつた。それは優しい人情的と温かみのある緑だつた。自分は朝飯の時にその風景の何ものかを、その膳の向うについた春のおひたしと一緒に噛み味うたやうな氣がした。それに烟りながらに罩めてゐた雨は、此暖國にある早い些かの若緑の艶を深くしてゐた。

自分が青い梅の實に朝焼けのやうに流れてゐる茜色を覗き見たのも、此旅籠屋で初めて發見したやうな氣持だつた。何か棄石を取圍む鋭い尖つた芽の擴がり、それらの葉が一樣にとかげのやうな光を見せる日光の直射に、自分は眼に青い薄い膜のやうなものを絶えず感じるのだつた。

自分は午後から晴れた庭土の上に、若木の緑をうつらうつら見惚れながら、さういふ風景に意識を集中され、餘りに永い間茫然としてゐる自分の中に何か白痴めいたものを感じ出し、靜かさが呼ぶ不安を一心に感じ恐いやうな氣がした。餘りに靜かなときに人間は知らずに命を落すものかも知れないやうな氣がした。さういふ不安は反對に益益自分を靜かにし、自分にハガネのやうな鈍い光を感じさせてゐた。

#### 十五 童話



自分は凡ゆる童話に偽瞞を感じてゐた。それ故、童話を書かうといふ氣が起らず、また子供等に自ら童話を書きつづつて見せる氣もなかつた。童話といふものは即座に作爲され同時に亡びていいものかも知れなかつた。ストリンドベルヒも童話を書いてゐるが、自分には性質の上からも童話は書けさうもなかつた。

支那のお伽話も自分は大仕掛で好かなかつた。自分はどういふ話をしていいか、それらの話がどうしたら子供たちに喜び迎へられるかを考へると、しまひに憂鬱になる外はなかつた。これは自分が作家であるための選擇上の苦衷に違ひない。作家は最後まで子供への讀物を選べないのが本當かも知れない。例令選擇はしても自分の物にして、子供等に薦めなかつた。いい加減な話を子供に説くことは何よりの偽瞞だつた。

自分は童話の國のことは知らないが、よい子供は自身彼のものであるべき童話を作るべきであり、我我の示す必要のないものであるかも知れなかつた。童話が作家の煙草錢だつた時代はもう過ぎたらうが、自分はさういふ作家が朗かな高い美しい氣持で、童話を作つ

て書くことに尊敬を持つてゐる。さういふ作家の優しい愛情の中に我我は子女を連れ込みたい希望を持つが、さういふ作家は果して天下に幾人ゐるだらうか。さういふ秀れた作家を自分で見出すことができるだらうか。現世の卑俗な一作家たる自分にもその雅量を披瀝することができる作家を見ることがあらうか。——自分はそれを疑ひ、その疑ふことに依つて憂鬱を感じてならないのだ。朗かであるべき童話の國に入るさへ、自分は並並ならぬ現世的な止み難い憂鬱の情に先立たれてゐる。

## 十六 童謡

自分の子供はやはり北原白秋、西條八十氏等の童謡を唄ひ、母親自身もそれを教へてゐるが、自分は童謡を書いた経験がないので黙つて聽いてゐる外はなかつた。兩氏以外の「コドモノクニ」の童謡をも唄うてゐるのであるが、中には到底自分の如き詩人を以て任ずる



家庭に、鳥渡聞き遁しがたい劣った作品もないでもなかつた。併しそれに交渉することは自分の敢てしない方針であつた。

自分の経験では北原氏西條氏、または稀に百田宗治氏等の童謡が娘によつて唄はれることに、その作家等に知遇を得てゐる關係上、決して悪い氣持になることはなかつた。北原氏、百田氏などは時々子供等にも接する機会があるので、餘計に親しさを彼女の方で持つらしかつた。ともあれ童謡の作家等に望みたいのは、かういふ子供の世界から見た童謡詩人の人格化が、我々の家庭にまで行き亘る關係もあり、大雜誌には少し位樂なものを書いても、子供雑誌の場合は充分によい作品を發表されるやうにされたい。自分も漫然として童謡などを書き棄てた既往の悪業を思ひ返すと、それを讀む小さい人人へ良くない事をしたやうに思はれてならない。何事も藝道の影響が子供へまで感化して行くことを考へると自分の如きは童話や童謡の清淨の世界へは、罪多く邪念深いために行けないやうな氣がした。

## 十七 輕井澤

### ○ 一 蟲の聲

今年くらゐ諸々の虫の聲を聞いたことがない。まだ宵の口の程に啼くのや、淺い夜半に啼くのや、眞夜中に啼くのや夜明け方に啼き始めるのや様様な虫がある。宵の口は賑やかに烈しく淺い夜には稍落着いて低めに、眞夜中には少少澁みのある唄れた聲がしてゐる。明け方には聽えるか聽えぬかくらゐに低く物佗しい。

それらの虫の聲の變つてゐることは言ふまでもないが、毎年涼宵に聞く筈のこれらの虫の音が、年齢の落着きとともに我物になるほど身を以て聽き入れられるのは、聞き落さずにも次第に落着いて用意されて來てゐるからであらう。我我は今日眺めたものは又明日



どれほど新鮮に眺められるかも知れない。彼らは變らないが我我は日日に變つてゐるからであらう。來年は最つと今年よりも多く虫を聴くことができよう。

## 二 螢

日が暮れてから散歩に出ようとすると、乾いた豆畑の畝の上に何やら光るものを見たが、隣の燈火が映る露ではないかとも思ふた。よく見ると明滅する螢火だつた。海拔二千七百尺の高原では螢のからだは米粒くらゐな小ささだつた。光にも乏しく淺間の熔岩の砂利屑の乾いたのに、取纏つて光つてゐる有様は憐れ深かつた。

## 三 夜の道

今朝道端を歩きながら晝顔の花を久瀾りで眺め、しまひに蹲んでじつくりと見惚れた。美しさ憐れさは無類にしをらしかつた。感傷的になつてゐる自分は此頃氣持にのしかかる

ものを多分感じてゐた。昨夜Sの書いたAの追悼文をよんで、暗い山間の道ばたを考へ乍ら反對の道を、愛宕山の中腹まで歩いた程だつた。

家へかへると、啼き出したきりぎりすは一夜毎に數をふやして、雨の中を通り抜ける程だつた。自分は懐中電燈できりぎりすの啼いてゐる豆の葉を照し、その青い翼をひろげて無心に啼き續けてゐる姿を見て故もなく感心した。

## 四 旅びと

あはれあはれ旅びとは  
いつかは心やすらはん  
垣ほを見れば「山吹や  
笠にさすべき枝のなり」

(芥川龍之介氏遺作)



旅びとにおくれる

旅びとはあはれあはれ

ひと聲もなき

山ざとに「白桃や

苔うるめる枝の反り」

註。「山吹や」は芭蕉の句。「白桃や」は芥川君の句。これらは朗讀風にくちずさまば  
「入あはれをおぼゆ。」

### 五 命令者

雨上りの道路を自分は五つになる女の子供と一緒に散歩してゐた。彼女は洗はれて美し

い砂の洲になつてゐる處を自分に踏んではならぬと嚴然として命令するのだ。そして彼女自身もそこだけ歩かなかつた。彼女の美しいものを愛し保護する氣持を自分は認め、愉快な畏敬の念をさへ抱くのだつた。併乍ら自轉車や他の散歩する人人は、それらの白砂の宮殿の上に惜氣もなく靴や下駄の跡を残して行くのだつた。併乍ら彼女は父親である自分のみ苛酷な程、その命令を散歩の終へるまで自分に守らせるのであつた。自分はあらゆる柔順なる父親の如くその命令に唯唯として服してゐた。

### 六 山脈の骨格

軒も朽ち、板戸は風雨に曝されて年輪を露き出してゐる、峠の上の村落だつた。風雨も多年の間には煤のやうに黒ずむらしく、此村落は暗い夕立雲の下にあつた。石も人の顔も黒ずんで見えた。自分はとある石の上に腰をおろした。

信越の山脈が聳えて眼の前にある。——併し自分は茫乎とそれらを打眺めた。自分はこ



詩に就て

これらの山脈が自分の滅亡後に猶登えてゐることを考へると平和な落着いた氣持になれた。  
彼らの骨格が信じられるのだ。



## 詩壇の柱

或晩、本屋の店先で福士幸次郎氏の「太陽の子」を見て、直ちにこれを購ひ求めた。大正三年に出版された此詩集の中には、今のプロレタリア詩派の先驅的韻律と氣魄とを同時に持合せ、激しい一ト筋の青年福士幸次郎の炎は全卷に餘蘆なく燃え上つてゐた。自分手擦れのした此詩集の存在に對し友情の外の敬愛を感じた。今の高村光太郎君の粗大を最一ト握り生活面で壓搾した彼の内容的な集中感は、見渡したところ到底天下に較べるもの無い位だつた。これらの詩が大正初年の作品であることと、そして何よりも彼の性根がその時代から今までへの二十年の歳月に、悠悠と働きかけてゐる健實な新味を思はざるを得なかつた。時時「童謡も書いて見る」フラスコ風の詩人、時時注文によつて詩物語をも案じて見る三流以下の詩人、又時時人生派風の嵐や海洋やケチ臭い生活詩を歌ふ詩人、



さういふ詩人の中で清節をもつ此「太陽の子」に於ける行動と韻律を約束した二十年後の立派さは、自分の眼界に瘦軀をもつて霜を衝くところの、詩人中の詩人、過去がもつ大なる柱石的な一奇峰を現出せしめた。縦令何人と雖も此一つの柱、云ひやうのない氣魄が全詩壇的な過去への大なる承認であることを知らねばならなかつた。

自分は數旬の後、大阪から來た或書店の書目の中に、彼が大正九年の版行である詩集「展望」を見て僅かに三十錢を投じて購求した。「感謝」の玲瓏、「記憶」の悒鬱、「友情」の美と韻律、「平原のかなた」にの思慕的な熱情、そして「昏睡」の中にある現世的ライオン、此詩は、(一人の男に智慧をあたへ、一人の男に黄金のかなたをあたへ……)の呼びかけから書き出して左の四行の適確な、驚くべき全詩情的な記録を絶した力勁さで終つてゐる。

この男に聲をあたへ

この男をゆりさまし

この男に閃をあたへ

この男を立たしめよ

そして又「夜曲」の美しい激越、調度と愛情。

「われは君のかつて見た海をわすれず、君の遊んだ濱を忘れず、その海によなくうつる星のごとく荒いうねりに影うつす星のごとく、われは君をば思ひだす……」

その他「幸福」の幽さ「泣けよ」の純朴、「船乗りのうた」「この残酷は何處から來る」それらの詩の内外にある健實な揺るがない確さは、もはや過去の詩壇に聳える奇峰的な壯大な壘み上げ、遙かに群がる諸詩人の上に光つてゐる。これらの韻律、行動、形態、表現の諸相は、今日の詩壇の最も柱石的なものであり、萩原朔太郎氏の「月に吠える」と相對ひ合せて、大なる詩歌の城をどつしりと上の方に乗せてゐる。風雲は彼らを訪れるであらうけれど彼らの抜くことのできない大なる柱は、益益その城を護るために、後代への重



い役目を果すであらう。今日の詩壇に筆剣を磨くの徒は何人も彼のために一ト先づ挨拶を交し、自分のもつ敬愛を同感することに依つて、彼を知ることを得たのを喜ぶべきであらう。

### 詩歌の道

自分は若い時分から歌を詠まうといふ氣持を持たなかつた。歌に對する才能の無いのも臆氣ながら知つてゐた。併し他の歌人の詠草は努めて讀んで自分の足しになるものは、自ら恍惚としてその道の「物の哀れ」を感じ味はひ、發句や詩の境致に窺へない或は相聞風な或は自然風物の詠草に、身を入れて讀み耽ることは樂しかつた。良寛の閑境や元義の情熱、又は實朝の豪直なども、勞作の暇暇の心を和め慰めてくれたけれど、依然作歌の衝動を感じたことは一度もなかつた。何處まで行つても自分の作爲を動かすことはなかつた。

昨年の夏自分は眼を病み、殆どその眼に繻帶を施してゐた關係上、かういふ時に發句でも作らうと思つて見たが、何故か發句への氣持が動かさず、詩にも氣持は働かうとしなかつた。眼を病むと氣持の鬱屈することは並大抵ではなかつた。自分は或朝早く庭に小さな朝顔の花を見出し、それが土の上を這うて咲いてゐる有様に物哀れさを身と心に沁みて感じた。歌を作りたいた氣持に打込まうとしたのも、初めて經驗する靜かな又得難い衝動だつた。自分は齋藤茂吉氏の歌や島木赤彦氏の歌を讀んで見て、自分も作歌の志を立てて見たが矢張り失敗して書けなかつた。自分はふと釋超空氏の歌をよんで暫らく茫然と見詰めてゐた。實際自分は近頃これほど鋭い唐突な驚きを感じたことは稀だつた。それほど釋氏の歌は咄嗟の間に自分に關係を生じて來てゐた。「赤光」以來歌に驚きを感じたことは、初めて経験だつた。自分は釋氏の境致には誰も手をつけてゐないことを知り、その茫茫たる道を釋氏が縦横に歩いてゐることに、ひそかに舌を卷いたのである。誰も知らぬ歌壇にこのやうな恐ろしい奴がのつそりと歩いてゐたことは、全く驚いて見るだけの「押」の強さを



もつてゐた。自分は前田夕暮氏に會うた時に釋氏のことを尋ねたが、前田君も釋は怪物だといふ意味のことを言つてゐた。自分の考へが謬つてゐないことは兎も角、遠い文壇の彼方にざらざら光つてゐる眼光のあつたことは、自分を猛烈に打つて來るのだつた。自分はどういふ意味にも油断してはならぬと思ひ、兄だか弟だか分らぬ藝術の分野に伏兵をしなければならぬ自分のネヂの弛みを締め上げるのだつた。凡ゆる詩歌の分野的仕事の隠れてゐる位置、匿れてゐなければならぬ境涯、それでゐて到底五十年を豫約する光芒の純粹さは、詩歌の大平原に朝日のごとく輝いてゐるものだつた。彼らの中に一生詩歌に埋もれてゐる人さへあり、それを矜持せず微笑してゐる人もあつた。

自分は詩歌への精進はしてゐても、最う動かないものを動かさうとする詩歌の最後の中に絶叫してゐるものである。動かないものを動かすところへ行き着くことは、併し歡喜に違ひはないが進歩ではなかつた。化石と同様な慘めさと憂苦だつた。自分はその扉を蹴破らうとしながらゐて、自ら重石の下にゐるも同様の苦衷を嘗めてゐた。それは詩が誠の「意

識」から抉り出されるものだつたからだ。自分は呼べども答へない詩歌の鐵の扉を、日夜蹴破り敲くものの慘苦を経験し、凡ゆる哄笑の中に仁王立ちに立ちあがり乍ら、身こ以て打つかつてゐるやうなものだつた。

最早あらゆる詩歌はその本體を搔きさぐるのではなく、本體自身が本體となる前の、文章が文章とならない以前、感情の動きが既に動きとならない前のものでなければならなかつた。自分の刻苦して打つかるものも自分の感情的な皺の多い時代には、その皺を剝ぎ起さなければならなかつた。その皺の下に未だある一滴の泉を自分は靈藥のやうに目にそそぎ込まなければならぬのだ。

### 詩と發句とに就て

發句も詩も別に自分には漁りがない。漁りのあるのは詩の中にあるもので壓搾されたも



のが、發句の姿となり内容となるだけである。特に職業的俳人や即興的詩人の輩に依つて區別される發句や詩の單なる形式的識別は、自分には最早問題ではない、——自分の問題とするところはそれらの根本の嚴格さを引出すことにあるのだ。

發句といへばさびやしをりを云ふのは、假令それらの言葉の存在があるとしても、直ちにそれに依つて片付けてしまふことは間違ひである。要は嚴格な、高い、登り詰めてゐる氣持をいふに過ぎぬ。我我は吾吾の最高峰を攀ち登つてしまつたところで、最う一度何物かを搔きさぐらねばならぬ。詩が感情的風景の域を脱してゐることは勿論、詩はそれらの上に立つ最早雲表的な氣稟の激しさから登り詰めた何物かであらう。——

### 遺傳的孤獨

元祿の作者の中で特に選ばれた丈艸や凡兆は芭蕉と共に自分らを撃つのも、かれらの高

峰が俗手の抵觸外に立つてゐる爲であらう。ホキツトマンやヴェルレエヌの詩風は詩風の一存在として、特に僕らの青春を襲うて共鳴してゐたのも、最早今日の僕らをしてたはれないものとして眺め飽きたのも、僕らの成人を意味する前に既に僕らが奈何に彼らよりも、より烈しい東洋風の孤獨とともに在ることに耐へる、千古不拔の遺傳的詩人であつたかが想像されるであらう。

西洋人は遺傳的に孤獨の外の人種であり、性情に孤獨の巢をもたないやうである。稀れに露西亞人にある北方的憂鬱の氣質は、トルストイやドストエフスキイの器に盛られたとしても、東洋風な、淡りした孤獨の城を建てることを知らない、——發句が幾たびか英譯されてゐながら、その十分の一すら味ひや甘みを傳へることのできぬのは、民族の遺傳的風習や生活様式の相違ばかりではない。「分りかねる」ものが未來永劫にまで「わかりかねる」ことであり、解らうとしてもその解るべき性質を根本から失うてゐるからに過ぎない。



## 悲壯なる人

詩が日本の青年の間に作爲されたのは、正しい新人の努力に依つてその地盤を築き上げたのは、今から二十年前であらう。河井醉茗や澤村胡夷、蒲原有明等もその記憶にあるところのものだが、寧ろ北原白秋三木露風の二つの存在は、新人詩壇の存在を固めるに力があつたものであらう。三木露風のねらひどころの可成りに正確な、洞察の幽邃は空虚な詩壇を一層低迷ならしめたことは萬死に値すべきであるが、併しあの時代に於て彼の詠嘆の矢弓はただちに騒騒しい混闘に陥入らないで、一ト通りの静寂を覗き見ようとしてゐたのは並並でない努力であつた。白秋の邪宗門に於ける異國情調の比較的嚴格な律調も、消化されて次の時代の格律となつたことも疑へないやうである。「思ひ出」の軽い調子が後期に悪影響を與へたことは云ふまでもない。

併乍ら白露二氏の時代から今日までの詩人中の詩人、新人中の新人として數へ上げることのできるのは、中野重治でもなければ千家元膺でもない。一人の劍の折れたる戦士萩原朔太郎であらう。時代の新勢は既に萩原を乗り越えてゐるに拘らず、彼はなほ昨日の新人の如き善良なる勇邁と、作詩的末期の餘焔に捲かれ乍ら、悲壯なる戦闘の眞中にゐるのは滑稽以上の嚴肅さであり餘りに悲壯以上の悲壯でなければならぬ。彼自らも猶悲壯淋漓たる中に、幾たびか洞震ひをして猶永く末期的餘焔の渦中に立つてあらう。

## 十年の前方

詩が今より最つと注意され愛讀されるには、やはり十年の歳月を要するであらう。その十年の曉にもなほ不運であるべき詩人の嘆息は、その時に於てすら更に十年の年月を曉望するであらう。我が詩を書き始めたころは依然十年の行手を眺めてゐた。その十年は今



吾吾の存在や周囲の存在だつた。しかも我我や吾吾の若い同行の詩人たちは、詩に於て衣食することを拒絶されてゐることは勿論、詩中に呻吟することをも許されなかつた。

詩人は詩人である爲の輕蔑、詩人でなければならぬ輕蔑の苦しい唾液を吐き出すまでに、可成な辛酸のあることは小説家が小説的唾液を吐き出すと一般であらう。しかも詩人は詩人である傳説的美名と、美名がもつ輕蔑とに悩まされ通してゐる。應需の尠い詩人の社會的進出は、小説家に及ばない如く他の何者にも及ばなかつた。併も彼らは風流才士でない如く甚だコセコセした虚名に憧れなければならぬ原因があるとしたら、それは詩人自身ではなく、彼の「十年」の年月が前方にあるからだと言つた方がよからう。彼ら詩人は絶えず十年を目ざして進んでゐる。これは小説家に於ける眼の前の生活にばかり拘泥してゐるのとは、少しく事變つてゐる。彼らが彼らの受ける輕蔑の前に、先づこの晴晴しい「十年」の前方を俯仰することに依つて、他の奈何なる藝術の士にも劣らない心魂を研ぎ澄すことを證據立てるであらう。その一事のみに依つて彼らは漸く彼らの仕事に受ける輕

蔑の蒼蠅を拂ひ除けることができるであらう。

## 詩錢

千家元麿氏は或時、或本屋の門を通り過ぎ乍ら、不圖囊中空しきを知り、鉛筆で數章の詩を書いて金に換へたさうである。これは千家氏自身から直聞いた話であるから嘘ではなからう。千家の詩風であつてこそ初めて此即興的場面が充されることを知り、僕などはかうゆくまいと思はれた。

詩を書かうといふ氣持は、殆ど瞬間にして消失する再び補促しがたい氣持である。金に換へるために書くことは決して悪いことではない。僕などの詩を書きはじめた大正元年前後には、詩に稿料を拂ふ雜誌社がなく、そのために現今の如く身を落して、詩人が雜稿を市に賣ることを潔しとしなかつたやうである。尠くとも僕自身は詩を書く外、雜文は書か



ないで破垣茅屋に甘んじて暮した。その頃から見れば今は詩人の生活も物質的に恵まれてゐると言つてよい。

詩人にして小説を書くことは多少輕蔑されることらしい。詩人で生涯小説を書き通すことも、よくよくの面魂をもたなければならぬ。千家氏の如く書店の門前で平氣で詩を書いて賣ることは、その平然たる面魂の中に、押しが強さがある。自分は何故かその話を面白く想出した。

### 圓本の詩集

圓本の中に詩集がその一卷の役目を持ち、改造社、春陽堂も其書冊に加へてゐる。天下の詩人數十氏が年代的に後代に傳へらるべきものは、先づ此詩集位であらう。同時に凡ゆる圓本中、窺かに其後代に於て古籍本としての市價が圓本中の何物よりも以上に價高き古

本の値を持つことは當然であらう。何故といへば小説本の紙價はその年代とともに低落するに先立ち、詩集類は歲月とともに其定價をセリ上げてゆくからである。萩原朔太郎の「月に吠える」や「青猫」福士幸次郎の「太陽の子」高村光太郎の「道程」日夏耿之介の「轉身の頌」千家元麿の「虹」百田宗治の「ぬかるみの街道」北原白秋の「邪宗門」佐藤春夫の「殉情詩集」西條八十の「砂金」堀口大學の「砂の枕」等は、最早その初版は定價の二倍以上に昇り、市上これを輕輕しく求められない。

以上の詩集はその詩人の出世作である所もあるが、それを讀む若い人人は次から次へと成長し、又次から次へと搜し求めるからである。詩歌に熱情を持つ青年は他の小説本の比ではない、彼等は一巻を求めると東京中の古本屋を掻き廻すことは平氣である。詩歌の士は誠に此心がけがなければならず、往昔の自分もまた此道を踏んで來たものである。圓本の詩冊がかういふ氣持を胎んでゐることはその編輯者と雖も自覺しないであらう。かういふ不斷な青年の背景をもつ詩集の書冊が、當然圓本中に於ける重大な役目を持つてゐる



こと、及び後年その紙價を上騰させることは瞭かなことである。圓本の使命はどうして之等の圓本を後代に残すかといふ今は非營利な寧ろ藝術的熱情を感じる時である。相應營利的成果のあつた今日に於て、先づ此等の圓本を後代の史家に残し、圓本の輕蔑を剝奪すべき良き書物の塔をどうして残すかを考慮すべき時である。新人を加へ最善を盡し、少し位損をしても自ら元祿の井筒屋庄兵衛をも念頭に入れるの時である。圓本時代に何人が圓本以上の仕事をしたか、その仕事に藝術的な眞摯な作用をもつ出版書肆がどれだけのたか、さういふ決定を爲すべき時である。自分は材料蒐集の上、これらの圓本論とその時代を論じたいと思つてゐる。圓本を検討することは時代の賜に手をさぐり入れることに均しいからである。

### 詩情

自分の詩を書いてゐた年少の時にすら、詩に遊ぶといふ氣持よりも、むしろ詩の中にゐて年少の生活を見てゐたやうに思ふ。何か心に添はず友情に叛き姉に離れた時には、机に對ひ詩中の悲しみを自ら経験したやうに思つてゐる。徒らに花下に春秋の思ひを練るといふ氣は無かつたらしい。假令、春秋の念ひを遣るにしてもその折折の自分を基としてゐたやうである。

年少の悲しさはそれ自身成長の後には詩情に似たやうなものであるけれど、年少の時は詩情どころではない。世に容れられぬと一般な悲哀であるやうだ。自分は叙情風な昔の詩を読み返すと、それを書いた時の日光の色、樹の匂ひ、その時の心もちなどが思ひ出されて來て、一枚の寫眞を眺め入ると何の變化りはないやうである。自分は既に壯年の齡に行き着いてゐるけれど、詩情は昔に稀に立ち還つて自分に何か考へさせるやうである。尠くとも叙情の詩を書いた自分を不幸だとは思はない、あの頃は自分の生活の中でも一番樂しかつた頃ではないかとさへ思ふのである。考へることに濁りがなく憂愁はあつても素直



な姿をもつてゐた。しかも青春の多くの時を詩に形ををさめ、一卷として自分の年少時代を記念したことは決して不幸ではない。——振り願つて往時を思ふよすがともなる仕合せへ感じるのである。

その頃の自分は東京の町町を歩くことを一種の旅行のやうに考へてゐた。實際、田舎に生れた自分には、海近い深川の土藏のある町通りや、大川端の古風な昔の艶を拭き出した下町を見物して歩くことは、郊外から出掛けるだけでも鳥渡した旅行に似た遠い感じであつた。土藏と土藏の間から隅田川を見、浅草公園では様様な見世物小屋に半日の心さむしい遊びをしたり、と或る店さきに眉目正しい、下町娘を見出したりして、ちよつとした旅愁を感じたものだつた。とり分けさういふ町を歩きながら雨に降られたりすると、國の町のやうに傘借りることもできないなぞが、一層他郷の感じを深めるのだつた。冷たい雨あしを眺め自分はよく浅草の知らぬ町家の軒下に佇んで、國の町でさういふ雨に降られた時のことを思ひ出して、漠然とした憂愁を感じたものであつた。この感じは東京に居馴れる

に従つて次第に消えて行く感じであつたがまだ折折心を掠めて残つてゐた。

### 詩集と自費出版に就て

自分が初めて愛の詩集を出版したのは大正六年の冬だつた。當時も今も處女詩集は自費出版に定つてゐる。本屋などは相手にしてくれるものではない。そのかはり幾らかの文名を贏ち得た後に更めて本屋が出してくれるものである。自分の愛の詩集も後に本屋から改めて発行した。同様「抒情小曲集」も自費で出したが今までにアルスや紅玉堂から度度版を重ねた。

自費出版はそれの償ひが精神的以外に酬いられるものではない。自費出版の意義はその詩人の大成した後日に初めて生じると云つてよいであらう。市井一介の詩人としての沈没する詩集は、本人には意味があつても文壇的に意義をなさないとしたら、これはよく考へ



た後に出版すべきものであらう。當今の如く思ひつきや當座の感興などから、簡単に出版されるべきものではなく、能くその詩人の全生涯の發足的な地盤を決定すべき、ゆるぎのない作品の堅實性を信憑してから、その出版を見るべきものであらう。後代に傳はる如き作の集成を見ることは、ひとり作者の快適とするところばかりでなく、全文壇に美しい記録を残すものと言つてよい。小説集は二三年にしてその書物としての形や値を失ふことが多いが、詩集本は年経るごとに高金の値を生じてゆくのは、作者に誠の心があるからである。又、別の意味で小説集は他の刊行物として出版されるが、詩集の重版は少く、その元の版のまま稀本として傳はつて行くが爲である。一朝にして亡びる詩集を出版するくらゐなら止めた方がよいといふのも此意味に徹するからだ。

### 過去の詩壇

當今では詩や小説ぐらゐ書けない青年は稀になつてゐる。全くのところ詩や小説の眞似事くらゐ書けないやうな青年は、その青年たる常識を缺いてゐる程度にまで、文藝が一般に普及してゐる時代である。何も詩や小説を書くことが特殊な仕事ではなくなつてゐる。それ故これからは詩や小説を書いて世に問ふことの困難であることは勿論である。餘程秀れた才能を持ち合せてゐるか、または異常な神経や心の持主に限り、世に問ふ所以のものを有つてゐると言へるであらう。

詩だけに就て言ふならば、その分野は既に唄ひつくされてゐると云つてもよい程である。千遍一律の詩には我我は疾くに飽きもし素讀に耐へないものがある。詩を書かうとするならば餘程の文學的教養の達人でなければ、餘程生れながらの素直な人でなければならぬ。尋常一様の詩作程度では、その作を擧げて天下の詩情を動かすことはできないであらう。それほど詩作する人人が多く相應の腕のある人が揃つてゐる譯である。曾て萩原朔太郎君や千家元麿君の得たる詩境と聲望をさへ、今後の詩人に於ては却却容易に得ることの出來



ぬのは、彼ら程の才能を持つて出て來ても時勢は彼らの二倍くらゐの才能を求めてゐるか  
ら遂に彼らの地位を得られないのである。この過去の二作家の二倍以上の作家が出て來た  
ら、完全に後繼者を詩壇は得たるものと言つてよからう。既成や新進の争ひは俗悪なる文  
壇ばかりではなかつた。詩壇にもその聲を聞くととき僕の思ふところは以上數言に盡きてゐ  
る。――

### 敵國の人

萩原朔太郎君に

雑誌「椎の木」に僕の爲に二十枚に近い論文を掲げ、君の知る僕を縦横に批評してくれ  
たことは、僕と雖も絶えず微笑をもつて讀むことが出來た。併し詩集「故郷圖繪集」に論  
及した君は、不思議に僕の本統の姿を見失うてゐる。君が自ら敵國と爲すところの僕の生

活内容が、君のいふ老成の心境でもなければ風流韻事に淫する譯のものでもない。僕は僕  
らしく靜かに生活して居れば僕らしい者の落着けることを信じるだけである。君が自ら僕  
を敵國と目ざすところは落着いて暮したい希望を捨てない僕を難するなら兎も角、徒に輕  
卒な風流呼ばはりや老成じみた一介の日蔭者としての僕を論するならば、僕はそれを返上  
したいと思つてゐる。

「故郷圖繪集」の本流はこの詩集以外には決して流れてゐない。君が諸作品の韻律や素朴  
に統一的な缺乏のあることを指摘し、「忘春詩集」に劣つても勝ることなきを言及してゐる  
が、この詩集の中にある僕らしい行き着き方を君は又幸にも見失うてゐる。君はこれらの  
詩が發句的要素から別れて出たものであることを指摘するのはよいが、何よりも「忘春詩  
集」以來かうならなければならぬ「彼」の素顔を何故に見なかつたかと云ふことである。  
自分は俳三昧や風流沙汰や老成心境から出發したのではなく、これらの道具立は不幸にも  
僕に加へられた迷惑な通り名に過ぎない。



僕は君の如き一代の風雲児を以て自稱するものではなく、只孤獨に耐へるだけの鍛へをあれ等の詩作の上に試みただけであり、夫等の試みは直ちに君には不幸にも老人臭く見えただけであらう。我我青年の末期にあるものは兎もすると老人臭くなるのは、事實それに近づきつつあるからでどうなるものではない。又努めて僕は書生流の詩域から脱したい願ひを持つてゐることは勿論である。

君のいふ如く僕を惨めな一個の庭いぢりとして生涯を送るものやうに見るのは、君が僕を見失うてゐる初めではないかと思ふのだ。僕の生活苦やその種種な面は直に君を打たないであらう。

君は僕に二人とない益友ではあるが、然し君は僕を読み落し見詰めてゐては呉れないやうである。離れてゐて遠くから僕を見てゐる親切気はありながら、僕が仕事によりどれだけ昔の僕から今の僕へ進んでゐるかを見落してゐる。君に見て貰はなければならぬものを君さへ見失うてゐる。僕のいふ孤獨の鍛へといふものも、君の誤解する風流韻事と稱する

間違ひも大概こちらあたりから別れて批評されたのであらう。

君が僕の發句を以て餘技とし月並であり陳套であるといふのは、月並の蘊奥は何者であるか、何故に僕が蕉風の古調を自ら意識に入れながら摸索してゐるかが能く解らないからである。

自分は發句を以て末技の詩作と思つたことがない。或意味で僕は僕の發句や短冊を市井に賣つてまで衣食したい願ひを持つてゐるのは、賣文の埃から遠退くことが出来るかと思ふからである。元祿天明の時代なら兎も角今日發句を賣つて米鹽の資を得ることは出来な

い。

僕は僕の本來のものを靜かに心で育てる外に僕の發句は生きないと言つてよい位である。

僕は又永年の詩作の經驗すら一句の發句に及ばないことを知つてゐる。或意味で發句を重んじる僕の凡てで無ければ全幅を刺繡すべき肝要なものだと云つてよい。何を苦しんで無意味な餘技を弄する愚を學ばう。——僕の發句を月並だと斷ずるのは新様破調を操らな



い爲の君の非難であらうが、破調の發句が出駄羅目な容易に入り易い句境であり、古調は凡夫の末技から築き上げることの困難なのは、君と雖も一應は肯くであらう。君の發句觀は不幸にも僕の未だ能く知らないところである。又君の説く蕪村は決して元祿の諸家を理解したのではない。君が粉身碎骨流の蕪村道の達人であることも、まだ寡聞なる僕の知らぬところである。その上君が今の僕を絞め上げ止めを刺すことは、寧ろ君へのお氣の毒な挨拶しか持合せぬ。君が天下の發句を論ずる前に先づ僕の止めを刺し、そして君の嫌ひな芭蕉流のさびやしを、を此世から退治すべきであらう。

僕の知る限りの芭蕉は一朝のさびや風流を説いた人ではない、芭蕉といふ能書的概念は漸く今日では、あらゆる新しい思想の向側にあるやうに思はれてゐる。併し眞實の彼は元祿から今日へまでの新人中の新人だつた。彼の異國趣味や無抵抗主義は後代のトルストイの中にさへその面影を潜めてゐる。太平の元祿にあつて彼は社會主義者になる必要に迫られはしなかつたらうが、併し彼は何よりも近代に生を享けてゐたら、彼も亦敢然として古

今の革命史に秋夜の短きを嘆じてゐたかも知れぬ。

### 文壇的雜草の榮光

詩が文壇の埒の外の雜草であるか否かは別として、詩は中央公論や改造や新潮には殆ど必要の無い一國の想華であることは、詩人であるが爲聰明なる吾吾の知るところである。そして又曾てそれらの大雜誌に掲載された詩が、均しく全詩壇に後世的作品を示した例は殆ど皆無であつた。吾吾の詩が今までの城砦を築き上げる爲に必要であり、我我をして忘恩せしめざるところのものは、片片たる三十二頁の同人雜誌の威力であり奪鬪であつたことは、何と文壇外の美しい榮光だつたことであらう。

或營利雜誌は吾吾の詩に婦女子の寫眞を挿入れて之を掲載した。又或雜誌は出題の下に作詩せしめ且つそれに應じた低能な詩大家があつた。又或乳臭き雜誌は全詩壇の詩作人の



詩を乞ひ、残酷に作詩人を珠數つなぎとして、天下に詩人愚を梟首として掲載した。自分は一々これを拒絶したが、遂に婦女子の寫真入りの詩だけは掠め取られた。自分は詩人が輕蔑せらるべき多くのものを、文壇人が斷乎として拒絶してゐる好例の對照を見聞してゐる。さういふところに雜草的卑屈と強制された遠慮とが、常識的な冷笑すべき習慣となる程度までに下つてゐるやうである。

### ゴシップ的鼠輩の没落

ゴシップ的鼠輩の曲説はともあれ、僕自身が老成的壞血病詩人であることに於て、止むなき餘命を詩壇に置いてゐる譯ではないのである。僕自身は今の僕自身を役立てる爲のふくろ叩きを辭さない物好きの中に呼吸してゐるものである。凡ゆる作詩人も其中期の作品の中に悶えもし、又退屈も窺へないではないが、彼らのなかには猶ふくろ叩きや締めつけ

を辭さない者のある位は、又同時にゴシップ的鼠輩の没落した時に、その彼らの誤りであることに心づくであらう。



文藝時評



## 一 月評家を弔す

往昔の文壇的事故のうちで、凡ゆる月評家は其の批評の目的を達することに於て輕蔑されてゐた。卑小、狹慮、仲間褒め、下賤、乳臭、それらの標語は月評家が四方から受ける非難の聲であり、その流れ矢は或は彼等の致命傷となつて彼等の姿を一時没落させた位だつた。凡そ月評家たらんとするものは徐ろに殺氣立たねばならず、殺氣立つた後に凡ゆる辻斬野盜の類にまで成り下らねばならなかつた。事實彼等は辻斬試斬後掛け拔打ちの外、正面から鯉口を切つた譯ではなかつた。それ故か彼等は此卑しい月評家的糊口を以て、充分に完膚なきまでに輕蔑された。往昔の月評家は例令その動機が辻斬の黨であつたにせよ、一脈の純粹さが無いではなかつた。しかも彼等はその目的を達することに於て敬遠され卑小視せられ、或者は悶悶たる客氣を擁いて空しく陋巷に飢ゑねばならなかつた。



凡ゆる月評家達は或は勇敢に討死した。死屍の累累たる彼方に作家達は悠然として残存してゐるのも、彼等にはどうする事もできない存在だつた。彼等の野武士風な好みも其眞向からの遣つけ主義もみな攻勢的殺氣のわざだつた。斯くて若い文壇の野武士は次第に討死をした。凡ゆる卑しい汚名の月評の中にある一つの眞實な確證さへも、冷笑の中に封じられて終つた。誰一人として月評家風の業績、その仕事の跡を想ふ者としては無かつた。事實彼等のその一行の文章の跡さへも書籍の上に偲ぶことが出来なかつた。名もない犠牲のあとは徒らに文藝の王城を取巻く雑草を肥すばかりだつた。

そして今自分の立つところの茫茫たる雑草の中から見ると文藝的王城に、その一人づつの果し合ひから何物かを取らねばならない。彼等を讀破することによつて自分から「批評」なるものを引摺り出さなければならぬ。一人づつの手腕と力量とを知らねばならない。降参する時は降参せねばならない。打込む隙は遁すことのできない果し合ひをせねばならない。凡ゆる末路悲しい月評家風な憎しみと不愉快な的にもなり、またそれ故の月評家風

な討死をせねばならない。誰一人として回顧する者もない路傍の死屍となつた凡ゆる過去の月評家のやうに、自分もまた同じい命運の跡を残さねばならないであらう。彼等を葬ふところの自分の立場をも知らねばならず、——啾啾の聲怨府のうめき聲により、自分らを用はねばならぬ。そのやくざな碌でなしの墓碑の上にも一莖の春花を抛打つて遣らねばならぬ。斯くて名譽ある併し結局は討死をする此仕事に就くであらう。

## 二 肉體と作品

瀧井孝作氏の「父來たる」(改造四月號)の素材は、曾て彼の最も讀者への親しみを繋いでゐる「父親」物の内の一篇である。かういふ素材と讀者との感情的關係は、それだからと言つて身邊小説の非難的にはならない。却つて隔れた親しみの密度を感じない素材よりも、我我はどれだけ此素材への親しみを感じるか分らない。身邊的な心境消息の本體は、



凡ゆる小説の骨格を爲すものであり、讀者へ生みつける關係は到底出駄羅目な設計された人生の、放射線風な描寫などの比較ではない。五年十年といふ風に作者にも重要な人生であり得るものは、五年後七年後の讀者にも作者を知る爲に重要な人生であつて、決して假定された罐詰的の人生の展開ではない。心境小説に非難の聲の起つた昨今にこそ、心境小説への睨みを強調しそれを趁ひ詰めることにより、心境小説経験者の最後の榮光を擔ふべきであらう。

瀧井氏の描寫の中の逶迤しさ、素朴さ、舌足らずの吃吃たる勢調、石屋が石の面を落す時の細かい用心を敢てする寧ろ木彫的な接觸は、漸く志賀氏等の文體を突破し完全に「瀧井孝作」へ填り込んでゐることは、一讀者としての自分に小さい安心を與へた。彼の如き鈍重な肉體的なねばり氣で押してゆく種類のものは、どういふ場合にも失敗することは尠いものである。何故かといへばその肉體的な壓力の手重さは、彼自身に問題を執るよりも今の新鋭であるための驕怠の輩に眞似のできないことだからである。新鋭であるための恐

るべき後の日の豫測的な頹廢時期を知り、新鋭であるための忘失されやすい恭愼の心を約束する彼の立場は、又一文人としての持すべき眞實な傲岸な態度を保つてゐた。尠くともそれは近時の新進氣鋭の作家の中に稀に見ることであり、自分の快敵とする抑抑の所以であつた。

「父來たる」の描寫力は一行あての叩き込みであり、田舎者の素朴さに溶かれた鋭い「氣持」風な疊み込みの仕上げだつた。停車場で半日を待つ彼の氣永さよりも、その氣永さを押し伸べる彼も一種の「力の人」に外ならなかつた。「無限抱擁」の中にある鈍重な行爲とその氣質のネバリは、遂に一批評家の筆端をも煩はさなかつたが、特異な位置、特異な作品としての此一書物を自分は愛讀した。何よりも彼が俳人としての文體にその描寫の力を得てゐるといふことは、到底市井の一下馬評に過ぎない。

彼の持つジワジワした味ひが年月とともに硬くなりはしないか、ジワジワがよい意味の皺になればよいが肉體的な皺になりはしないか、皺の中に垢がたまりはしないか、これら



の不安はないでもないが、彼は體力的にこの皺をよく用ひ艶を含ませ「瀧井孝作」をこの種の固まつた一作家に膠着させてはならぬ。

### 三 芥川、志賀、里見氏等の斷想

芥川龍之介、志賀直哉、里見淳氏等は各名作家である。尠くとも芥川氏は凡ゆる大正時代の描寫の最極北、描寫的な文章上の最も著しい標本であつた。その氣質の鋭さに依つて從來の文章的な皮の幾枚かを剝脱し、古い明治年代の文章の上に彼自身の「皮」を張り付け是を入念に研ぎ澄した人だつた。この年代に芥川氏ほどの「皮」を示した文學者は他にもあつたけれど、彼ほど丹念な磨きの中に精進する文學者は極めて稀だつた。彼にはいい加減の「加減」さへ分らぬ淫作家だつた。打込みは一字づつであり、一行づつの杜撰な打込ではなかつた。それ故か、彼は不思議にその文章上の苦吟に後代への「虹」を豫感して

ゐたものごとく、氣質上の鑄刻的な薄命さは、顧みて又首肯するところが無いでもなかつた。

芥川氏の生涯の敵は志賀直哉氏の外に、何人の光背も認めなかつた。志賀氏の中に拔身を提げて這入る芥川氏の引返しには、甚しい疲勞の痕があり容顏蒼みを帯びる辟易があつた。彼の生涯の中に最も壯烈な精神的に戦ひを挑む時は、何時も志賀直哉氏を檢討するこゝとだつた。生地で行き、ハダカ身で行く志賀氏は彼の持つ「皮」の下にもう一枚ある、薄い卵黄を保つ皮のやうなものを持つてゐた。芥川氏はその一瞥を経験することに彼自身の皮を磨くことを怠らなかつた。志賀氏は素手だつたけれど、芥川氏は何か手に持たなければ行けなかつた。彼等はその描寫の上で斯の如く斷然別れてゐた。そして彼は大正年間の描寫風な文章の型を何人よりも的確に築き上げ、これを兼て彼自身が常に總身に負ひ乍ら感じてゐたもの一つである「後代」へその八巻の全集を叩きつけて去つたも同様であ



つた。

志賀直哉氏の文章の中にある「時代」はふしぎに芥川氏よりも、直接的な長命と新しさを共有してゐた。單なる新しさであるよりも以上に氣持風だつた。氣持の接觸だつた。言葉よりも頭のヒラメキを感じ美に肉感があつた。かういふ文學は凡ゆる大正年代の「文學」に於て試みられた最初のもの、その文學的な耕土の掘返しの一者だつた。その「氣持」の掘下げは直ちに巧みに即刻に利用され踏臺にされ、凡ゆる文學的な青年のもつ文章に作られた。その速度ある作用は彼自身さへ知らぬ間に、美事な次への文學的な下地への吸入を敢て爲されてゐた。もうそれは志賀直哉氏のものであるよりも次の時代のものに違ひなかつた。自分は驚くべき大正年代の鏡のやうな縦断面に、云ふまでもなく、名作家志賀直哉氏を見ることは、餘りに靜かすぎる光景であつた。その靜かさは芥川氏を圍繞するものと同様な靜かさだつた。

里見弴氏も亦名作家に違ひない。芥川、志賀氏の正面的な少しもたぢろがないところの、ひた押しに迫るちからを里見氏は背負投げを食はして置いて、徐ろに彼はその巧みな餘裕のある小手先を示しこれを彼の文章の上に試みてゐた。彼のすべり、彼のなめらかさ、そして彼の最も特異な體を開いて見せる小手先、就中、彼の進んで碎けた分りのよい、鮮かさ過るほがらかさを、釣の名人か何かのやうにその糸を縦横に投げ操つてゐた。芥川、志賀氏とは向きも姿も反對してゐたけれど、不思議な眞實を磨きあげるための描寫の中では、その蒼白い炎を上げてゐることも亦同様な或名人型を築き上げてゐた。

彼等は日本に於て特記すべき名作家であり、文章と氣質と同様に秤られ沁み込みを見せてゐる作家だつた。人生觀上の作家は他に求めねばならぬが、「描寫」の上に充分な記録的存在としての三氏は、その三面相打つところの新しい「古今」を暗示してゐると言へるであらう。



## 四 詩人出身の小説家

今から七八年前に時の批評家だつた江口渙氏は、自分の或一作を批評して「彼は人間を書くことを知らない。」と云つたことがあつた。自分は小癩な氣持を起して例に依つて聞き流してゐたが、事實彼の指摘する人間が書いてゐないことも、自分の胸に痞へないこともなかつた。彼のいふところは要するに詩人出の小説家が多く低迷する不用な輪廓描寫や、下らない草花や風景的な文章を抉り立てるところにあつた。又同時に各新聞の文藝欄に陣取る月評家等は、言合したやうに自分の小説がいかに詩人的であるために下らないかを品隋し、隙もなく自分の行手をふさいでゐた。併し自分は凡ゆる雑誌に腕の限り書き續けてゐるより外に、自分の力量を示すことができないやうな時代苦を経験してゐた。自分は机にさへ對へば立ちどころに一篇の作を書くことができ、それを直ぐに叩きつけることに依

つて些かも後悔を感じなかつた。此恐るべき文學的野性の中に荒唐な作をつづけた四五年の間、自分の詩は漸く衰弱し優雅な思ひは枯渴された。自分は豊かな肉を剝ぎ取られ骨だらけになつて残存してゐた。江口渙氏の所謂人間を書かずにて、詩的描寫のいい加減な眞向からの遣つけ仕事に親しんでゐたからだつた。

詩人出の作家の持つ病癥的な、胡魔化し小説といふより人生には不用な詩的描寫は、自分だけには亂次だらしのないものだつた。同時に詩人出小説家の八方の口は開いてゐて、何處を向いても彼の「一篇」は作ることできるよう、多くの不用の詩や言葉や語彙や感覺を持ち合してゐた。又それ故に詩人出の小説家が飽かれること、本物の人生の眞中に行き着かないまでに没落するのも、おもに此詩人的な素質上の濫用に原因してゐた。凡ゆる詩人出の小説家が一家を爲さない間に姿を匿し、或は滅亡するのも強ち詩人であるといふ境涯的な排斥ばかりではなかつた。詩的感情の利用から受ける輕蔑自身さへ、多くの文壇的な冷遇の所以を醸すものに近かつた。



島崎藤村、佐藤春夫の二氏位を残す外、詩人出に天下に地位を得てゐるものはなかつた。當然天下を二分する位に詩人出小説家の轡を駢ぶべき筈であるのに、殆ど寥寥二三氏を數へる位だつた。彼等がいかに多く詩人的であることに於て、奈何に小説家に不向きであるかが理解されるであらう。佐藤惣之助、千家元麿氏等の折折の勞作すら、殆ど凡ゆる小説的な片影さへ残さずに沈湎した。佐藤氏の「大調和」の二三の作すら決して感覺派の諸公に遅れるものではないが、作家運に恵まれない詩人出小説家の常として酬いられること皆無であつた。均しく彼等の素質的な江口渙氏の指摘する「人間」を書く事をしない爲ではなからうか、さういふ江口渙氏の評的確證はともあれ、凡ゆる批評は同時に五六年の後にも猶振返つて肯定すべきものは肯定すべきであつた。月評家の須臾にして消失すべき運命的な仕事さへ、後に其作家に思當る光芒を曳くものである事も忘れてはならない。――

詩人出小説家である島崎藤村氏の近作、(女性四月號)は、どういふ方向にあつて彼が百

年の大家であるかといふことを示してゐるか?――「草の言葉」一篇は島崎氏の老いたる感傷の結晶であり、冬の日の植物の心を彼自身に引當て、靜かに詩のごとく物語つたものに過ぎない。小品と銘を打たれてゐるが同時にこの老詩人の溜息を聞くやうなものである。島崎氏に於て初めてそれを公にし是を認められるであらうが、自分のごときさへ此種の文章を發表する氣がしない。かういふ寂しい氣持を盛るに何故に最つと島崎氏は人生的な織り込みを敢てしなかつたかを疑うてゐる。

## 五 時勢の窓

雑誌の廢刊と圓本的墮落は新しく世に問はんとする作家に、その進路と行手を塞いで見せた。文壇への登龍門は大雑誌の光背に據る事ではなく、小刻みな雑誌によつて少しづつ の聲名をつなぎ得ることに於て、漸くその名聲を小出しに羅列することすら肝要な時勢で



あつた。それ故新進的な湧くが如き光彩を見ることは無いであらう。新感覺と稱せられる作家等も少しづつ遅遅とした歩みにより、今日の横光利一氏、中河與一氏、片岡鐵兵氏等を爲したる外、岸田國士、岡田三郎、犬養健、稻垣足穂氏等と雖も、往年の既成作家の如き喝采の中に現れたものでない、新進の道、つねにあるが如く又その道展げざるに似てゐるやうである。

文藝の事たるや寧ろ小刻みな聲名による恭愼な進み方も、一舉にして表面に現れる事も其執れも悪くはないが、唯時勢は既に既成作家にすら生活的にも危機を、新進には曾て無かつた程の苛酷な試練を與へてゐる。それ故に今後新しい作家が輩出しても、或は往昔の古文人のごとき生活の苦節を敢て偲ばなければならぬかも知れない。既に我我既成の徒にはその用意が出来、陋居に破垣を敢て結んでも、説を大衆に求めることも亦自らの立場を危くするものではない。未だ現れぬ新進もまた新緑の窓邊に己れを鍛へるために飢渴位は、平然として併し心で喰ひ止めて行くべき時であらう。

## 六 齋藤茂吉氏の隨筆

歌人齋藤茂吉氏は或は文壇外の人であるかも知れぬ。文壇の人であることは齋藤氏の場合何か知ら當つてゐない、と言つても矢張り文壇の人以外ではないやうである。彼は唯作品で戦ふ文壇人でないだけで結局文壇の人であるかも知れないのである。木下杢太郎氏とともに文壇の埃や塵の外に職を持つてゐること、折折の西洋紀行の文章を發表してゐることに於て、嘗に茂吉氏が歌人でないことだけは解るやうである。

昨春以來齋藤氏の滯歐紀行の數多い發表は、描寫力の素直さや洞察の鋭どさに加へて、氣質上の鈍重な併も明るい壓力を自分は感じ、さういふ描寫の少ない文壇に稀に見るよい文章だと思つた。併も齋藤氏の描寫力はいつも明るい一面と又曇天的な風景に接すると同



様な鬱陶しさをも持つてゐた。鋭どさは折折文章の下地に網の目のやうに針立つてゐたけれど、それは文章や描寫の上の企圖でさうなる職業的賣文の徒の談る鋭どさではなかつた。氣質と肉體とが行動することを感じる、自然な素直な鋭どさだつた。鈍重な人間のもつ深い鋭どさだつた。「西洋羈旅小品」(中央公論四月號)の一篇の中にも、歌人齋藤茂吉の吟懐は常に齋藤茂吉の吟懐に止まらずに、その描寫の底にある誠の相貌は、人生の本道へも交渉をもたらず手腕を美事に準備し且つ表現して餘すところがなかつた。山河水色に對する氏の感情はもはやそれらを自然的な獨立性のあるものとせず、我々と同様な感情的な位置へまで呼込んでゐることは、彼が歌人として「赤光」以來の秀拔の偉才を示してゐるものであるが、しかし彼は山河の相貌に單に同化作用を起してゐるものでなく、實に彼は涙ある山嶽の姿に接觸するまでの、それらの自然のもろさに抱かれてゐる氣持を経験してゐる。かういふ感情の微妙以上の微妙さの中にある茂吉氏の描寫は天下の文章に對うて挑戦せず靜に隔月位に發表され、識者にのみ愛讀されてゐるばかりである。かういふ秀れ

た文人の位置に自分は感激の言葉無きを得ない。

歌人齋藤茂吉氏が大正三年代に出現したことは、當時の歌壇を粉碎し根本から建て直した。併しそれにも勝る彼の目立たぬ文章の上の仕事は文壇の外側を靜に流れてはゐるが大河は自ら人の目にふれないでゐない、——それらの描寫には左顧右眄が無く、意識的な調和や作法やうまさ、を練ることなく、鈍重に尖鋭な、細緻に粗大な、折折氣質上の明るい悒せき哀傷を沁み互らせてゐる。時にある會話のうまさと美しさ、それは生きてゐることばをそのまま両手にすくうて、そつと紙の上に置いたやうにまで自然な呼吸づかひを知つてゐる。不思議に文章に時代の匂や調べが查べられずに、十年後にも古くならないものを持つてゐる。歌人の臭みを帯びず、きざな氣取りが無く、しかも彫刻的であることに於て原始的な鑿の冴えをもつてゐる。これを歌人の文章であるといふことに於て片付けることは、彼の何物をも知らぬ者であらう。事實に於て彼は歌人の境涯を抜け出てゐることは、描寫



の確實な獨立性のある未來を證明してゐるからである。

## 七 勞作の人

徳田秋聲氏の「日は照らせども」(文藝春秋四月號)を讀んで、何よりも事件の經過の上に、作者として凡ゆる手腕を盡せるものであることを知つた。その複雑な事件的な人生を澁滞なく押し開き、それに解決を與へないでゐるところ、凡ゆる父親の平凡性を一步も出ないでゐること、自ら處理し裁きを強調すること無きところ、尠くとも作品の上に何等の愚痴や口説きのあとがなく、白髮的な嚴霜を偲ばせる一父親の面目の窺はれるのは、讀者として自分の快く感じた所以だつた。

「日は照らせども」の人生にはその素材の上で、もはや批評的なものの挿入されない確實

性を持つた作品である。かういふ人生の諸事件的な作品への斬り込みは、無理にその隙間へ鑿を入れてコヂ開けねばならぬ。さういふ俗流の批評は自分にはできない藝當である。このやうな作は若い人のためにどれだけ存在していいか分らぬ。この中に妙に人に教へる描寫的な人生を物語り、且つ暗示してゐる。これは徳田氏の中に持つものの徳の一つの現れであらう。決して作品的な刺戟に據るものでなく、或親切な作品はかういふ風に書くべきであるといふ約ましい指導が、作者も意識せず讀者はそれを何氣なく獨りで受入れ會得するやうである。作の一つも書かうと意圖する者、作家たり得る者へも此感情が働き繋がつて行くのは、他の作家には全然無いと言つてよい。作家として彼がかういふ位置にあることは、いかに彼が人生への直面的な原稿紙と彼との間に、隙間の無いことを證明するものに外ならないであらう。そして彼が何よりも小説の先生であることを否めない。彼が益益小説の先生であり得ることにより彼の實直な人生記述者である符牒を一層重い位置に押上げるであらう。



昨年好文壇で最も活躍したのは、北村小松氏や片岡鐵兵氏、又かういふ僕自身でも無かつた。瘦魂よく世評に耐へ信するままに生活し、又數多くの勞作を爲し得た徳田秋聲氏であつたらう。その人生に處するところの老骨は、彼が末期的の餘燼の中に眞率な正直過ぎる程の組立を敢てした。冷笑と慢罵の中に荒まずに一層愛すべきものを愛し、いそしむべき作を怠らなかつたのは、何と言つても「嚴霜」的であり、何處までも彼自身を以て遂に押し切つたことは美事な勇敢さであつた。數多くの作品の中にある尖りと不安とに震へてゐた愛情も、年を経て作に重要な美しさ素直さを發見されて行くであらう。例令、それが老境に點ぜられた一女性の兎角の事件であつたにせよ、包まず匿さず堂堂と寧ろ人間的なほどの發露を敢てしたことは、遂に彼の場合のみでなく一文學者としての最後の氣魄を示したことは、人目を忍ぶ老醜の痴情の多き現世に、正直なほど壯烈なる人生の最後の炎を上げたことはその作品の上に秀作を求め得られた點に於ても、我我は徳田氏を先づ活躍し

た昨年の重なる人物としなければならぬ。

## 八 作家の死後に就て

近松秋江氏の「遺言」(中央公論)の中には、綿綿たる子孫に對する露骨な一文學者の「遺言」的なものが書かれてゐる。かういふ内容は近松秋江氏ばかりでなく、尠くとも子供を持つてゐる作家の陰氣な午後の想念を愜せく曇らせて來るものである。此場合近松氏は最も己を語ることに情熱を多分に持つ饒舌家であり、その事に依つて他を憚る人ではない。しかも憂慮や懸念の情が寧ろ叙情的な愚痴の形態を取つてゐるのは、その性質的なものの上に止むを得ないことであらうが、さういふ愚痴を愚痴ることによつて死後の「彼」自身を見ようとするのも、現世の苦勞人秋江氏が未來へ働きかける物哀しげな感情の吐息であらう。併乍ら最も壯烈な生活者としての凡ゆる佛の中には、子供や遺族を思へば思ふ程押



強く現世に坐り込むのが、老境の重厚な態度でなければならぬ、秋江氏には此境の物腰が坐り切らないで、語るに急ぐはその子を愛する感情を誇張してゐると言はれても、それが或程度までの本統であることを首肯しよう。老境にあつて子を思ひ遺族への念ひを潜ませることは、常に鐵の如き意志が無ければならない。若し我我が老境に於て嘆き悲しみを敢てしなければならぬとしたら、その鐵を打砕くの概がなければならぬのは、文學的の老境の大地盤のできた後に何の不思議があらう。

我我は作家の遺すべきものは改造社や春陽堂の印税の計算ではない。吾吾の遺さなければならぬものは只一つよき作品の威光や信頼であり、そのよき作品が命令する現世的生活の物質充填であるとしたら、最も壯烈なる作家は葬費をも用意しないで逝去すべき榮譽を擔ふべきであらう、吾吾の死後の吾吾の遺族は改めて彼等の生活を敢て實行しなければならぬ。そのために彼らの必要とする養育費が、父親の作品の命令による當然の物質的な

収入があれば兎も角、それらの収入が無かつたことは作家として後代へ傳へるもの無かつた所以である。吾吾の死後に敢て爲される吾吾の子孫の輕蔑や冷笑こそ、或意味に於ける最も辛辣な批評たり得ることは否めない。一つの叙情、子孫への公開状であるところの「遺言」の本體も、結局は近松氏の大なる愚痴の中に、彼自身の心に養ひ得た永年の描出的遺言たるに止まつてゐるだらう、綿綿の情はよく人をとらへ得るが、吾吾の聞きたいのは鐵の自ら烈日の下に焼け伸びるときを、「遺言」の壯烈な中に望みたいのである。しかも彼が彼の精神と肉體への衰弱期にあれほどまでに後慮の愁や心配りを敢てすることも、彼一人ではなく人の親の中にあるものであるが、同時にそのためにこそ腹の底に押し沈めて置くべき生涯の用意ではなかつたか？——何ごとも默然として老の日を歩め、口を利かず敢然として御身の途を歩め、かういふ言葉こそ若し老の日にあらん時に僕たちの考へることである。



我我はどういふ意味にも吾吾の死後の安らかな遺族を想像することができず、又安らかな遺族を想像し得ても今日の我我には用が無い。吾吾の生きてゐる間にすら不幸な貧しい生活が、吾吾の死後に於て安らかであることは絶対にない。吾吾の遺族は我我と生活を共にしたため、凡ゆる貧と戦ふくらゐの心の用意は既に覺悟しなければならぬ。吾吾の生きてゐる間にピアノを習つてゐた娘らも、或は憐寸の箱張りをしなければならぬかも知れない。學校も途中で廢めなければならぬかも知れない。さういふ窮乏の中にこそ吾吾の子供は生き育たねばならぬ。吾吾の妻はボロと垢とから立ち上り、これらの子供のために凡ゆる憐寸の箱張りや女工、派出婦にまで成下り働かねばならぬ。一文人の内妻の成下りは決して不名譽ではない。敢然として一文人の妻として凡ゆる賤業に就くことは、錢餘りて飽食するよりどれだけ文人風であるかも知れぬ。我我が吾吾の遺言を敢てすることは「用意はもうできてゐるか」と唯一言で済むだけである。この言葉こそ吾吾の全生涯へ雷鳴のごとく傳はるべきである。同時に派出婦とまでに成下つた吾吾の女らやその娘の生涯

にも、依然たる此雷鳴のごとき聲を常に落し記憶させねばならぬ。一文人はその一代で亡びてしまへばいいのだ。近松氏の「遺言」一篇に依つて自分は以上數行を考へ得たことを謝して置く。

### 九 「文藝趣味」の常識化

自分の文藝的な生ひ立ちの時代には、單なる文藝趣味といふだけでも極めて少數な仲間のみ限られ、文藝的な人物といふ目標だけでも可成りに新しい異端者の様に思惟されてゐた。親兄弟は勿論の事、親戚の間柄にすら一種の左翼的な思想として吾吾の文藝趣味は危険視され嫌厭されてゐたものであつた。それらの頑迷さに最後まで戦うて來た吾吾の今日から見れば、凡ゆる文藝趣味の一般化は、常識としての文藝の存在を意味し、どういふ青年にもなほ文藝の理解に遅れた者が無く、社會的な日常應酬にも現代の文藝が挿話され



るやうになつたのは、彼等青年の父や母の智識的成長を物語ると同時に、會ての長髮的文藝趣味の頽廢と没落、文學者風の生活の放埒と衝氣とから完全に脱却されたものであつた。今日の青年は詩や小説を書かないものは無く、また詩や小説を創作し得るといふことは、往昔の青年が歌俳諧を作り得ると同程度の、廣汎な意味の常識たる以外に何等「藝術的」なる特種の人物でないことを證明するに外ならないものだつた。それ故文藝批評を以て青年間の日常生活の目標たり得ることは、何等の疑ひもなき一般的な文藝の普及を物語るものであつた。

文藝趣味を危険視したところの一つの封建、それらの成長が青年間に流布されることの憂慮を以て終始してゐた道學者及び吾吾の周圍は、今日の文學的な諸の表現に依るところの根本的な人間學の要素が茲にあつたことに氣付き、再び文藝趣味に鋒を向けることは無くなつた。そして青年の一般的な解釋による文藝趣味は、それ自身を吸入することによる離れた愛讀者風の好尚と、又文藝を制作することに依る意欲的な好尚との、自ら二手に別

れて文藝城を包圍してゐることも實際であつた。文藝を文藝としての位置に客觀的眺望を以てするものと、それを制作する側の位置とが凡ゆる青年間に識別され得たのも、文藝の何物であるかと云ふことへの理解を必然に會得したからであらう。才能無くして文藝の使徒たることは往昔の青年の意企であり、今日に於ては最早問題にすらならない。

## 十 大センチメンタリズムと長篇小説

トルストイやドストエフスキイの長篇小説の中に洪水のごとく奔流して盡きなかつたもの、ニイチエやワグネルを包む重厚な城砦的な感情の壓力、凡ゆるベエトオベンの組織的な會ての表現の内で最も完全な表現だつたシンフォニー、ミケランゼロ、ドラクロア、ゴッヤ、それらは一つとして大センチメンタリズムの蘊奥を極めてゐないものはない。最も有害な碌で無し紙屑センチメンタリズムもその人間の大成期に於て「落着」を表はすこと



は、猶俗流の間にさへ認められないこともない。

あらゆる長篇小説の軌道に必要なものは、終始渝る無き熱情の發揚であり、大センチメンタリズムに磨きをかけることに依つて、その人生的な建築を爲し遂げることができ得であらう。大センチメンタリズムの影を見ることが無き長篇讀物は、その讀物としての性質上、ただちに倦怠を腐蝕することはいふまでもない。長篇小説の上の倦怠は罪惡以上の偽瞞であることを知らねばならぬ。彼等の讀物としての用意と條件との過程に於て時代的であり、凡ゆる人生の相貌の横縦の幅や奥、そして最も約束されねばならぬことは、何よりも思想的な時代の潜在層が唯一とされることである。彼等はそれ自身で時代の新聞でなければならず、あらゆる反射鏡的な效果ある六百萬人の抱擁をも爲し得る、大通俗のハガネによつて切斷されねばならぬ。「戦争と平和」「罪と罰」の存在、西鶴物の各物語の存在、ワグネルとベエトオベンの唱道、そして我我は、——我我作家はその生涯の内に三つ以上は決して書き得ない長篇に手を觸れねばならないのだ。種々なデッサンを爲し終へた後の

我我が必然着手しなければならぬ仕事は組み建てられた塔を初めから遣り直すことである。その仕事への打込みは、我我を包圍する大センチメンタリズムに據らなければならぬのである。今日まで吾吾の日夜攻勢して來たところの凡ゆる弓矢の巷、あらゆる硝煙の的であつたところの一つしかない、今見紛らすと復永く打ち攻めることのできない大センチメンタリズムを攻め上げることに、吾吾の長篇小説の軌道を朗らかに認識することができ得であらう。

吾吾の爲し得たところの凡ゆる作品的經驗とその量積、自然に我我を押し上げたところの一つの人生的なクライマックス、聳える一つの塔、その塔にともしびを點すことにより、其窓窓を明るくすることに依つて、吾吾の長篇小説、生涯の仕事、吾吾の最後の情熱を盛り上げることができ得であらう。吾吾のもう一度立ち上ることをも約束し、又吾吾の過去の或はやくざな仕事すら奈何に「今日」の我我を築き上げるために必要だつたかを人人は知り、人人はこれらの塔を初めて見上げて、絶えず人生への睨みを忘れなかつたところの



我我及彼等を注目するであらう。

## 十一 政治的情熱

今度の選挙で自分も労農黨のM氏に一票を投じた。政治に興味を持たない自分だったが、何か旺んな情熱を感じ其情熱に觸れることは好ましい愉快さであつた。尠くとも其時代的な炎を自分だけのものとして手強く感じることは、日頃の倦怠や文弱の暮しから見ても勇ましいものに違ひなかつた。自分は此雜然たる喧騒の中に我我も待ち得、又同感し得る情熱のあることを不愉快に思はなかつた。

菊池寛、藤森成吉二氏の落選には、分けて菊池氏の落選の報を得たときは何か腹立たしかつた。彼だけは公平な眼を以て當選させねばならなかつた。自分は號外を見て暗い街巷に佇んで二重に腹立たしかつた。彼が蒼蠅的新闻記者から文壇の大御所などと謳はれるこ

とは取らないが、さういふ下馬評を外にし、勇敢な彼は、文壇的一城主を負うて立つ、他の城主等の持たぬ不斷な「戦國時代」の地圖を開いて見てゐる男に違ひなかつた。神経質ではあるが「粗大」を持つてゐることも事實だつた。かういふ意味では中村武羅夫氏もまた「粗大」な野性を持ち合してゐた。彼等の此「粗大」は谷崎潤一郎氏の作品の相貌に於ける「大谷崎」たる所以のものと自ら異つてゐるが、菊池中村二氏の有つ粗大さに、何時も社會的な時代相ともいふべき、何か文壇の流れを突き抜けたものを持ち合してゐた。と言つても彼等は同時に社會的事業に加はつてはゐないが、ともに文壇社會ともいふべき雰圍氣の中に何時も何等かの「炎」を上げてゐることは疑へない事實だつた。

ともあれ菊池氏の落選はその報を得てそれを知つた自分を極度に陰鬱にした。同じ文壇の空氣を吸つてゐる同士のよしみは、平常彼と言葉を交す機會のないにも拘らず、自ら異常な意識の下に潜り根強く働いてゐることを、自分自身のために發見もし喜びもした。藤森氏は郷里の鬭争ではあり當選するものと思つてゐたが、自分はその不幸な報を得て意外



な思ひをした。温恭なる彼のために自分も逆流する残念さを感じるのであつた。藤森氏が労働もされ其道につかれたことには、自分は別に説をもつてゐる者であるが、ともあれ、あれ程の勞苦を思ふだけでも彼も疑ひなき當選者でなければならなかつた。この苦き經驗は或はよき次の時代を形づくることを自分は信じて疑はない。

## 十二 大衆作品の本體

自分は大衆文藝といふものに未だどれだけでも親愛の情を感じてゐない。一つには大正年間に發展した此新様式の作品が、自分を根本から動搖させ感激させないからである。自分を教育した今日までの諸種の純文藝作品は、人としての手ほどきから細かな其心持の構へにまで入り込んで、殆ど完全に自分の人間學を卒業させたと言つてよい。かういふ今の自分を建て直し牽制すべき新様式の陣容は、全きまでに自分を壓倒して來るところの、今ま

でに無かつた素晴らしさを持つものでなければならぬ。尠くとも自分を永く考へさせる凝視的な集中を此新様式の文藝の上に注ぎたい熱望を持たねばならぬ。

大衆文學は僕のごとき文藝の士の讀物である限り、僕程度の讀書力への刺戟と牽制である限り、又凡ゆる讀書階級を抱擁する通俗の可能性を持つものであるとすれば、タテからも横からも隙間のない渾然たる新作品の發揚でなければならぬ。凡ゆる過去の純文藝の鋭どさ深さをもつ作者の用意があり、それらの純文藝的氣質からも岐れて出た目覺ましい一つの進み方としての、これらの大衆作品の陣容が存在し得るとしたら、それは臆て僕を人にならしめた諸の小説中の人生への睨み方の訓育と同じい効果を、大衆自身の頭や心臓へ投げつけるであらう。讀み物は單に面白い範圍のものは絶対に作者側の良心から抹消されるべきことであり、讀者側からは面白かつたといふ興味ではなく、面白くもありタメにもなつたといふ事實、その作品自らにあるよき營養ある人生學や人間學の諸相が、一作品の讀後にすら影響するといふことが、大衆作品のよき標準であり目的であらねばならぬ。



大衆作品の陰鬱な過去——中間讀物時代から今日までへの脱却と進路には、まだ厳格な内容への検討が爲されてゐないことは、漸く大衆的といふ呼聲の流行の鎮まりかけた今日に於て、辛辣にこれを解體し批判する必要がある、彼等がどの程度までの心臓的讀物であり得たかに就て、大衆自身が旺盛な大姐を搬出するであらう。それは時を経て彼等自身の反省によつてのみ此新様式の存続を意味するであらう。

圓本流行の今日の大衆階級の進み方は、トルストイやドストエフスキイ、イブセンやストリンドベリイの中にある大衆性、その莫大な通俗性を嗅ぎ出したことも事實である。尾崎紅葉、夏目漱石にある通俗への妥協、凡ゆる大作家の持つものが常に藝術的であり得ると同時に、又通俗的な透明な太い線を全作品の中に刺し貫いてゐることも事實である。

「レ・ミゼラブル」の大通俗の用意、「罪と罰」の伏線、「復活」の人間學初歩、これらは今日に於て殆ど何人もその大衆性のある作品であることを否む人はなからう。讀書階級が進むことは奈何なる峻峯的作家をすら一先づ大衆自身の大群衆へまで引き下ろさねば承知しな

い。芥川龍之介、谷崎潤一郎すらも、大衆自身は敬意ある眼付をして「面白さ」の中へ引き込んで、今日に於ては既に消化してゐるではないか。吾吾のいふ大衆作品が生やさしい樂ないい加減な仕事ではなく、一時の流行的作爲を弄するものではなく、純文藝の本流に交流すべきものであることは明白であらう。中間讀物の成上りや純文藝の苦節に耐へなかつた輩が、此群衆的な大センチメンタリズムの本道を濶歩することは、聽て初めて自ら滑稽であつた彼自身の姿を見出すであらう。凡ゆる大衆作家は手厚い重みのある濶歩を純文藝の本道の上にも踏みつけ得ることにより、光榮ある此新様式の中に文學としての古今に氣脈を通じるであらう。今の混線された中ではどの程度までの大衆作品であるかといふことを識別しがたいと言つてよ。

### 十三 稻垣足穂氏の耳に